

女子大の自己呈示

—大学パンフレットの質の分析から—

志水 宏吉¹⁾・新谷龍太郎²⁾・岡邑 衛³⁾・金南 咲季⁴⁾

要旨

本論文では、日本の女子大学のパンフレット分析から、各大学が自身をどのように「自己呈示」しようとしているのかを捉えることで、岐路に立つ女子大学の「現在」の一端を明らかにしようとするものである。20年前の女子大学の大学パンフレットを分析した先行研究の結果と比較すると、第1に女子大学であることをアピールする女子大学の割合が増えた一方で、共学化した女子大学は女子大学であったというルーツをアピールしている大学はほとんど見られなかった。第2に、20年前は大学の「個人の幸せや夢を実現する場」としての側面が強調されていたのに対し、現在では「世界や社会で活躍する女性を育む場」としての側面が強調されていた。第3に、全体的に卒業生や在学生のストーリーが描かれていることは多いが、改革を強調する都市部の大学と牧歌的な雰囲気のある地方の大学の違い、掲げる女性像が革新的である大学と伝統的である大学の違い、資格取得を強調する大学とそうではない大学の違いなど、いくつかの相違点が見いだされた。

キーワード：女子大学、大学パンフレット、自己呈示、ブランディング

目次：

- I. はじめに
- II. 地区別分析
 - 1. 東日本の女子大学
 - 2. 東京の女子大学
 - 3. 西日本の女子大学
 - 4. 共学化した女子大学
- III. 全体の分析
 - 1. 調査目的・方法および視点
 - 2. 分析結果
 - 3. 考察
- IV. まとめ
- 引用文献

1) 武庫川女子大学教育総合研究所・教授 2) 同志社女子大学現代社会学部・教授 3) 千里金蘭大学
栄養学部・准教授 4) 相山女学園大学情報社会学部・准教授

I. はじめに

本論文では、日本の女子大学の大学パンフレットの分析を行う。そのことによって、女子大学の「現在」の一端を明らかにしたいと考える。

タイトルに、「自己呈示」という語を採用した。本論文が参照する重要文献が、本リサーチレポート第38号（2008年）に収録されている安東・鎮の「女子大学の自己像」と題された論文である。これは、当時の女子大学の姿を明らかにするために、大学パンフおよび自己点検・評価報告書を収集・分析したものである。本論文のⅢ節では、その論文との直接の比較を試みている。

先行研究では、「自己像」と形容されているものを本稿では「自己呈示」と言い改めた。「自己呈示」という語は、ミクロ社会学および心理学の領域でよく使われる言葉で、「社会的に望ましいイメージを他者に与えるために行われる印象操作」といった意味をもつ（ゴフマン 2023）。大学パンフレットに表現されているものは、基本的に各大学がアピールしたいポジティブな姿であり、その語の方が「自己像」という語よりも事態を把握するうえでより適切だと考えたからである。

女子大学は今、岐路に立っている。1998年に98校存在した女子大学は、2023年度では74校にまで減少している。本論でもふれているように、ここ数年にかぎっても、特に首都圏や京阪神地域といった大都市部において、募集停止となる女子大学や共学化する女子大学の事例に事欠かない状況が続いている。

なお、本論文のもとになっている大学パンフの分析・収集は、当武庫川女子大学教育総合研究所の研究プロジェクト「女子大学の変貌に関する教育社会学的研究」のファーストステップに当たる作業として実施されたものである。2024年の8月に全国の女子大学のHP等を通じて各大学の2025年度の大学パンフレットの郵送を依頼し、同9月にかけて合計72冊のパンフレットを収集することができた。本稿は、それによって収集されたパンフレットをデータとした利用したものである。

上述のように、本論文は、2025年度以降、科研費等の資金が得られたら全面的に展開しようとしている共同研究プロジェクトの最初の一步として執筆されたものである。本リサーチレポートに掲載されている金南・志水による論文は、本論文で使用したのと同じデータを、対応分析という手法を中心とする量的分析によって検討した結果を整理したもので、本論文とは「双子」の関係にあるものと位置づけることができる。合わせてお読みいただきたい。

以下本稿では、Ⅱ節においてまず、「地区別分析」を行う。全国を「東日本」「東京」「西日本」の3つの地区に分け、予備的な整理を行った結果である（1～3項）。合わせて、2001年以降に共学化した23校の大学パンフを別途収集し、同様の整理を行った。比較群としての「共学化校」の特徴をごらんいただきたい（4項）。続くⅢ節では、収集された女子大学72校のパンフ全体のなかみを、安東・鎮（2008）と同一の枠組みによって分析した。20年ほどの時を経て、女子大学がどのような変貌を遂げつつあるのかを読み取っていただければ幸いである。最後のⅣ節では、女子大学の自己呈示という観点からの簡単なまとめを行っている。

Ⅱ. 地区別分析

1. 東日本の女子大学

（1）対象校とその特徴

本項でみていく「東日本」の女子大学というのは、東海甲信、首都圏（東京都を除く）、東北～北海道に所在する女子大学23校のことである。ここではまず対象校の特徴を、表1をもとに簡単に確認しておきたい。

まず大学数は、東北～北海道が5校、東京を除く首都圏が11校、東海が5校、甲信が1校であ

表1 対象校の基礎情報

No.	地区	所在県	設置区分	学校名	短大の有無と 備子の兼別	学部数 (2024.5時点)	学科数	在籍者数 (2023.5時点)	設立年	収容率	偏差値	宗教的背景 の有無	総頁数
①	東北～ 北海道	北海道	私	藤女子大学	四	2	6	1,773	1961	92.3	35	有	106
②			私	北海道武蔵女子大学	別	1	1	情報なし	2024	データなし	37.5		34
③		宮城	私	宮城学院女子大学	四	4	9	3,225	1949	107.5	41.25	有	92
④			私	仙台白百合女子大学	四	1	4	810	1966	69.8	35	有	66
⑤		福島	私	郡山女子大学	兼	1	2	422	1966	81.2	BF		70
⑥	東京を除く 首都圏	群馬	公	群馬県立女子大学	四	2	4	908	1980	108.1	47.5		63
⑦		埼玉	私	十文字学園女子大学	四	3	9	3,337	1996	89.5	37.5		113
⑧			私	女子栄養大学	兼	1	4	1,914	1961	107.8	41.25		113
⑨		千葉	私	愛国学院大学	別	1	1	73	1998	18.3	BF		25
⑩			私	和洋女子大学	四	4	9	2,728	1949	92.7	38.75		77
⑪			私	川村学園女子大学	四	3	6	843	1988	58.5	36.25		46
⑫			私	聖徳大学	兼	6	8	2,948	1990	73.3	38.75		127
⑬		神奈川	私	フェリス学院大学	四	1	3	2,104	1965	96.5	35	有	81
⑭			私	鎌倉女子大学	兼	3	6	2,361	1959	115.7	38.75		137
⑮			私	相模女子大学	兼	3	10	3,481	1949	94.7	36.25		93
⑯			私	東洋英和学院大学	四	2	4	1,415	1989	73.7	36.25	有	68
⑰			私	清泉学院大学	兼	3	4	706	2003	96.6	35	有	72
⑱		東海	岐阜	岐阜女子大学	四	2	3	845	1968	64	BF		42
⑲			私	金城学院大学	四	6	14	4,904	1949	96	41.25	有	167
⑳		愛知	私	椋山学園大学	四	7	11	5,363	1949	98	40		137
㉑			私	名古屋女子大学	四	4	6	1,657	1964	69	40		85
㉒			私	岡崎女子大学	兼	1	1	271	2013	67.8	BF		50
㉓			私	名古屋柳城女子大学	別	1	1	171	2020	61.1	BF	有	34

る。女子大学に限られない傾向であるが、千葉・神奈川などの首都圏や愛知県といった都市部に多く、東北や甲信では少ない。設置区分は1校のみ(⑥)が公立、その他は全て私立である。学部数は1～7学部と幅がみられ、単学部は8/23校、4学部以上は6/23校を占める。短大を有する大学は、10/23校ある。設立年は、1951年以前の「伝統校」が5校、1975年以降の「新設校」は10校である。なかには、2020年代になってから新設された大学もみられ(②③)、「女子大学縮小期」にあることを鑑みると興味深い。

収容率¹は18.3%(⑨)～115.7%(⑭)と大きな幅がある。偏差値²は、BF～47.5(⑥)であり、BFを30として換算すると平均は36.6となる。宗教的背景は、8/23校で、いずれもキリスト教を背景としていた。パンフレットの総頁数は、25～167頁であった。表には記載していないが、学長が女性の大学は4/23校(④⑬⑲㉑)と少数であった。

(2) 分析結果

以上をふまえて次に、各校のパンフレットの分析結果についてみていく。具体的には安東・鎮(2008)に倣い、1)パンフレットの形式面の特徴、2)キャッチコピー、3)セールスポイント、4)女子大学の意義に整理しながら結果を提示する。その後、5)で収容率の高い大学に絞り、特徴の分析を行う。

1) 形式面の特徴

ここでは、各校のパンフレットの形式面の特徴に焦点を当てる。まず体裁については、全てA4サ

¹ 武庫川女子大学教育総合研究所「女子大学統計・大学基礎統計」(<https://kyoken.mukogawa-u.ac.jp/statistics/>)を参照した。表2以降も同様。

² 偏差値は河合塾大学受験大手予備校である河合塾が運営するWebサイトのKei-net(<https://search.keinet.ne.jp/>)において提供されている「2025年度入試」用参考データの説明文に記された偏差値を使用した。具体的には、2024年7～9月にかけてWebサイト内で大学名を検索し、一般選別の偏差値欄に示された、学部全体の情報を反映した偏差値を使用した。その際35.0～45.0などと、値に幅がみられた場合は中央値を算出して使用した。表2以降も同様。

イズとなっている。表紙に使用されている紙の質感は、通常のコート紙等とは異なる大学が2校みられ、ツヤのある光沢紙(⑧)、高級感のある特殊紙(⑮)を使用することで、他大学とは異なる印象を与える工夫がなされている。

短大を有する大学は10/23校あるが、冊子を大学と短大とで分けている大学は3校に限られ、大半が大学とセットであった。総頁数は、最少で25頁(⑨で単学部)、最多で167頁(⑲で6学部)と幅がある。総頁数は短大の有無や学部学科数等による部分も大きい、平均すると83頁であった。内容は、概ね「大学の理念」「沿革」「学長メッセージ」「学部紹介」「就職・資格支援」「卒業生インタビュー」「学部学科紹介」「キャンパス紹介」「学生生活」は共通している。また、「留学・国際交流」や「地域連携・貢献」も大半の学校が盛り込む内容となっている。

ただし、いくつかの点で相違点もみられる。その一つに「卒業生インタビュー」と「学長メッセージ」の配置が挙げられる。典型的には、冒頭で卒業生を紹介し、後半や末尾で学長メッセージを掲載といった「学生主体」を前面に打ち出す構成の大学(⑫⑬⑳など)と、冒頭に理事長や学長のメッセージを打ち出し、中盤や後半で卒業生を取り上げるといった構成の大学(③④⑤など)という対比がみられ、「誰からの」メッセージを強調したいかという力点や見せ方に違いがみられた。なお、学長メッセージが掲載されていない学校も1校(⑤)みられた。

また、冒頭で、就職や資格(⑦など)、地域連携・貢献(⑤⑮など)、大学の歴史とブランド(⑲など)、寮・下宿の安さ等の「コスパの高さ」(⑱)をもって来るなどして、差異化を図る様子もみられた。

2) キャッチコピー

続いて、見開きや冒頭に示されたキャッチコピーは、「咲くべき花を咲かせよう」(①)、「自分が花開く」(②)、「未来を私らしく彩る」(④)、「あなたらしさをともに育む」(⑦)、「なりたいたいわたしは、ここにいる」(⑪)、「新しい私の扉をひらく」(⑯)、「私を選ぶのは、わたし」(⑳)といったように学生一人一人の個性や主体性を大切に、一人一人に秘められた可能性を最大限に「開花」させられる場所であることを強調するものが多く確認された。

これらの発展系として捉えられるのは、⑫聖徳大学の「私のなりたいを超える、私たちは挑戦に飢えている」である。ここでは、挑戦に「飢える」学生たちのニーズに応え、あらかじめ個々人が想定し得る「なりたいたい」を超えて、大学生活を通じて想像することのできなかつた自分に会える機会を提供するといった、よりふみこんだかたちで個々人の可能性を強調する姿勢を確認することができる。同様に⑲金城学院大学の「好奇心のその先へ。強く、優しく」もまた、「一歩先」というイメージを強調するものと捉えることができる。

その他、「愛のある知性を」(③)、「For Others」(⑬)、「人々と主に生き、人々に仕える」(㉓)、「感謝と奉仕に生きる人づくり」(⑭)といったように、利他精神を強調する学校も一定数みられる。③⑬㉓はキリスト教の背景に支えられた学校であるが、⑭鎌倉女子大学はそうした宗教的背景は有してはいない。

独自の特徴を打ち出しているのは、⑱岐阜女子大学の「コスパの高さ！」や⑧女子栄養大学の「食は生命なり」である。岐阜女子大学では、冒頭に「耳より OTOKU 情報 オトク感を比べてみて!」、「大学選びの決め手はコスパの高さ！」という頁が設けられ、北陸・東海地区で「面倒見が良い女子大学」、「入学後、生徒を伸ばしてくれる」、「小規模だが評価できる」、「就職に力を入れている」という項目が、「2023年全国の高等学校の進路指導教諭が評価する大学」ランキング上で1位であることが前面に打ち出される。また、奨学金情報の提示や、地方という土地の特徴を逆手にとって「岐阜での一人暮らしは圧倒的にリーズナブル」であり、寮や下宿も安い点を魅力として打ち出し、投資とリ

ターンの観点から「コストパフォーマンスが良い」ことを売りに出している点で興味深い。また、女子栄養大学では、「食は生命なり」という文言で、鋭く特化された専門性を強調し、栄養学の「パイオニア」の育成を掲げるという一貫した印象を与えることに成功していると言える。

最後に、2025年度より共学化する⑰清泉女学院大学（改名後は「清泉大学」）、⑳名古屋女子大学（改名後は名古屋葵大学）の2校では、「ここから、はじめる。これから、ひろがる。」、「共創社会、葵で凛々しく」との文言が、女子学生・男子学生の写真が隣合わせに掲載された写真とともに打ち出され、共学大学として再スタートを切り、イメージの刷新を強調したキャッチフレーズになっている。

3) セールスポイント

続いて「セールスポイント」に関しては、安東・鎮（2008）にあるように、いずれの大学でも就職・資格の情報は積極的に打ち出されている。具体的な就職先や資格の特色は多岐にわたるが、福祉職や保育・教育関連職、管理栄養士、看護師などの資格が多くを占めている。これらは、女子の高校段階以降の進路選択では、「資格」や「手に職」といった職業志向が意識される傾向、すなわち「ライフイベントの影響を受けてもなお雇用や賃金の面での安定性が確保され、仕事と家庭の両立が図れる特定の職業へ」女性をいざなっていくジェンダートラックが維持されている（伊佐 2021 など）といった先行研究の知見と照らし合わせても、今後さらなる探求が求められる興味深い点だと言える。

ただし、そのアピールの程度や仕方には違いもみられた。たとえば、紙面の組み方や表現方法の工夫等にもよるため、単純に頁数の比較のみでその程度を判断できるわけではないものの、「資格」と「就職・進路」に関する頁数が全体の10%を超える大学は8/23校であった。資格・就職に最も頁数を割いていたのは⑱の岐阜女子大学で、その割合は31%であった。紙面では、「地元での就職支援、『望む分野』で『地元就職』を叶える」といった文言とともに、「県人会」とのつながりを強調する等、地方にある女子大学ならではの特徴がみられた。また、資格・就職が、紙面の14.2%を占める⑦の十文字大学では、冒頭の頁に「就職と資格の十文字」という見出しを大きく掲載し、就職率、資格取得率と人数、取得可能な免許と資格一覧、1年次から始まるキャリア支援、資格試験対策等を提供する学修支援センター等の情報が12頁ほど続き、卒業後の進路を手厚く支える大学であるという印象が強く打ち出され、他大学との差異化が図られていた。

4) 女子大学の意義

女子大学であることの意義を明確に強調する記述がみられたのは23校中5校であった。具体的には、②北海道武蔵女子大学、⑥群馬県立女子大学、⑪川村学園女子大学、⑬フェリス学院大学、⑮相模女子大学、⑲金城学院大学である。

たとえば、2024年に新設された②北海道武蔵女子大学では、学長メッセージの中に「女性の活躍という社会的課題に真摯に向き合う大学」という見出しを掲げ、「実社会で活躍できる女性輩出」を志す旨や、「女子大学では異性を意識することなく、のびのびと勉学や活動に取り組むことができます。それら取り組みは自分にも〇〇ができるんだという新たな発見と自信といった豊かな人間性をももたらすはずです」といったように、女子のみからなる環境がもたらす強みに言及している。同様に、⑥群馬県立女子大学においても、学長メッセージの中で、「女子だけの環境だからこそ、古い性別役割分担意識にとらわれることなく、誰もがリーダーとして活躍できる機会に恵まれ、のびのびと個性を発揮できる場となります。日本のジェンダー・ギャップは、国際的に低い評価がなされており、その是正は大きな社会的課題となっています。そのためには、女性への高度な教育と豊かな経験が欠かせません」と明確に述べられている。また、⑮相模女子大学では見開きの頁に、「120年余という歴史を持つ相模女子大学は、まさに日本の女子高等教育の原点として、フロンティアとして、他にはないノウハウ、文化、環境を充実させてきました」、「ひとり一人の感性や発想を型にはめるので

はなく、より大きく育てるための、のびのびとした、それでいて面倒見が良い教育風土。それは人として、女性として、人生の階段を見つけ、登り始めるための貴重な時期に、まさにふさわしい舞台」であることを明確に謳っている。⑩金城学院大学では、冒頭に大きく取り上げられた卒業生のインタビューのなかで「何をするにも『女性だから』という思い込みがない環境だったので、自分の軸を育むことができた」という言葉が紹介されている。このように、女子のみからなる環境によって、異性や性別役割分業意識からの影響や「型」にはめるような外的な力をなるべく避けるかたちで、「のびのび」と個性を発揮したり、リーダーシップをとる機会に挑戦できたりするといった意義が明確に打ち出される学校が複数みられた。

一方で、具体的な明言を避けながら、提供する学びの中に女子大学ゆえの付加価値や意義を打ち出そうとする大学もみられた。たとえば、⑪川村学園女子大学の「ここにくればきっと、女性だからこそできる、あなただからこそできる何かが見つかります」や、フェリス学院大学の「単に『男性なみ』をめざすのではなく、女性ならではの発想の発信源となるべく、共に挑戦いたしましょう」といった言及が挙げられる。また、先述の⑮相模女子大学でも、「女性ならではのしなやかな発想力、豊かな包容力を身に着けながら未来を世の中をみつめ、道を、答えを見つける人になる。そういう素晴らしい人財を育てていくこと」を「存在価値」として謳っている。そこでは、女子大学であるからこそ、身に着けることができる「女性本来のやさしいチカラ、やわらかなチカラ」という能力があるといったように、「女子大学は女性ならではの能力伸長に長けている」といった論理が確認できる。また、大学独自のアンケートをもとに87.9%の学生が「女子大学であることに良い影響があった」と回答していることを紹介するケースもみられる(⑱)。これらの意義が具体的にどのような授業や生活を通じて体现されるのか、という点への言及は少ないが、なかには、女性学などのジェンダー関連の科目の充実や(⑪⑳など)や、卒業生たちによる分厚いネットワークに埋め込まれるなかで、「様々な業界でリーダーとして活躍する女性」や「起業して輝いている女性」等から話を聞く機会が多く、そうした機会を通じて世界を広げることができるといった、ロールモデルの存在を強調する方向性(⑲)もみられた。

また、女子大学の意義を明確に言及するまでには至らないが、女子教育への言及は14/23校でみられた。たとえば、「女性が自立し、自らの力で輝くために良質な人間教育を実践」(③)や「女性の自己実現、社会貢献を重視した総合的な人間形成、幅広い分野で活躍できる女性リーダー、自立した女性の育成」(⑯)といったように、女性の自立や社会での活躍を推進することを使命として強調する文言は多くの大学でみられた。また、こうした女性の自立を掲げる創始者の願いが、時代が変わっても受け継がれていることを強調する大学も複数みられた(⑦⑲㉑など)。⑭の鎌倉女子大学のように、末尾に保護者向けの頁が設けられ、今日、これまでの女性のライフキャリアの典型例であった「M字カーブ」が解消されつつあり、現代女性は、結婚・出産を経ても働き続けるといった多様な生き方があることがグラフの推移とともに提示され、こうした女性の多様な生き方を支える上で強みを発揮する大学であることが強調されているケースもみられた。

一方で、「親切正直の校訓と、社会人として自立し家庭人として一家の幸福に貢献する健全な女性を育成するという建学精神のもとで女子教育を行う」(⑨)や、「人らしく、女らしく、あなたらしく、あなたならではの」という建学の精神を掲げ、「きめ細やかな感性を発揮し(女らしく)」といった表現がなされるなど(⑱)、旧来の性別役割分業に親和的な側面にも女子大学や女子教育の意義を見出していることが示唆される大学も複数みられた。

女子大学の意義や女子教育に関して全く言及がない学校も9/23校みられた。共学化する2校、⑰清泉学院大学では言及はない一方、⑳名古屋女子大学では、時代の変化をふまえて共学化は必要な

流れであることに言及し、今後は、「性別を超えて様々な価値観の人が共に学び、議論を深めることが必要」だとして、むしろ女子大学であることの意義を積極的に拭うような方向性が読み取られた。

このように女子大学の意義の打ち出し方および女子教育への言及は、部分的な言及、もしくは言及無など概して消極的である傾向が読み取れるが、縮小期という岐路に立つ今日、大学間でその方向性や積極性に多様化がみられる様子が示される結果となった。

5) 収容率が高い大学の特徴の分析

最後にここでは、2023年度の収容率が100%を超えている大学に絞ってその特徴を概観しておきたい。具体的には、③宮城学院女子大学(107.5%)、⑥群馬県立女子大学(108.1%)、⑧女子栄養大学(107.8%)、⑭鎌倉女子大学(115.7%)の4校である。

まず偏差値については、宮城学院女子大学で41.25、群馬県立女子大学で47.5、女子栄養大学で41.2と、女子大学の中では高い偏差値となっている。ただし鎌倉女子大学は23校の中では最も収容率の高い大学であるが、偏差値は38.75と平均よりやや上にとどまる。

設立年は、「伝統校」、「宗教的背景あり」、大規模校と言える「在籍者数3,001人以上」は宮城学院女子大学のみで、あとの3校は1952～1974年に設立され、宗教的背景はない。群馬県立女子大学は学生数908人と小規模校であり、公立の女子大学や偏差値の高さからも選抜制が高いという特徴が読み取れる。女子栄養大学と鎌倉女子大学は、それぞれ2,000人前後と中規模である。

地理的には、宮城県仙台市(政令指定都市)、群馬県佐波郡、埼玉県坂戸市、神奈川県鎌倉市が所在地となっている。宮城学院女子大学や群馬女子大学は、東北地方や北関東の大学数の少なさや、女性と男性と比較して、自宅から通学できることを重視して大学選択をする傾向があるといった先行研究の知見(津田2017など)もふまえると、周辺の学生を一定数は確保しやすい環境だと考えられる。女子栄養大学や鎌倉女子大学は東京からおおよそ1時間以内とアクセスもよく、首都圏をはじめ、都市部の学生の選択肢になるという強みもあると考えられる。

群馬県立大学以外は「併設校あり」で、宮城学院女子大学では大学付属認定こども園と「宮城学院中学・高等学校」が、女子栄養大学は短大のほか、都内に男女共学の「香川調理成果専門学校」が、鎌倉女子大学では、短大のほか幼稚園から初等部、中等部・高等部も有するなど、いずれも母体が比較的大きいという特徴がみられる。

学べる内容は、宮城学院女子大学で「現代ビジネス学科、教育学科、食品栄養学科、生活文化デザイン学科、日本文学科、英文学科、人間文化学科、心理行動科学科、音楽科」、群馬県立女子大学で「国文学科、英米文化学科、美学美術史学科、文化情報学科、グローバルコミュニケーション課程、グローバル社会システム課程」、女子栄養大学で「実践栄養学科、保健栄養学科、食文化栄養学科」、鎌倉女子大学で「家政保健、管理栄養、児童学科、子ども心理学科、教育学科、初等教育学科」となっている。女子栄養大学では、栄養学という一貫した専門を強く打ち出しているほか、群馬県立大学では留学に力を入れ、国際的な学びに対するニーズに応える強みがあることが伺える。一方で、宮城学院女子大学、鎌倉女子大学ではより幅広い選択肢を提供しており、教養科目も重視していることが読み取れる。

あくまでパンフレットを基本とした情報に限られるが、改革の方向性は、宮城学院女子大学および鎌倉女子大学、女子栄養大学では近年、主だった改革はみられていない。宮城学院女子大学では、2016年の学院創立130年目に「大きく生まれ変わった」ことが強調され、「社会のニーズに応える新たな学部を開設(大学学芸学部を改組、現代ビジネス学部・教育学部・生活科学部を設置)」、「女子大学の強みを活かし、学生の夢や才能を開花」、「分かりやすく、丁寧に。大学を社会に開放」が謳われていたが、以降8年間は特に目立った大きな動きはみられない。鎌倉女子大学は、2009年に教育

学部設置以降、主だった改革はみられず、どちらかといえば「伝統が育む実学教育」といった触れ込みで伝統を押し出している印象が強い。女子栄養大学では、2025年4月より、データ解析やイノベーションといった情報化社会に対応した内容を織り込んだ専攻が設けられているが、一専攻の変更であり、その他の目立った改革は見当たらない。一方で、群馬県立女子大学では、海外の大学との協定締結を定期的に行っているほか、2021年に群馬経済同友会と連携・協力協定、2022年に群馬県教育委員会と包括連携協定などと、ネットワークを拡大させていることが読み取れる。また、2023年には文学部に文化情報学科を設置し、情報技術やデータ分析等の「文理の枠を超える」授業の提供等を開始したほか、2024年には国際コミュニケーション学部への新課程設置を通じて国際的な学びを強化し、「在学中に、一度は海外へ」という文言とともに留学にも力を入れていること等が示され、積極的に改革を行っている様子が読み取れる。

以上、収容率の高い4校の詳細を確認してきた。以上の知見をまとめると、必ずしも4校に共通する性質が明確にみられたわけではないものの、相対的に偏差値が高い、地理的に周辺の学生を一定数確保しやすい環境にある、母体が比較的大きいなどの特徴がみられた。一方で、学びの特色（専門／教養の比重）や近年の改革の程度については違いがみられる結果となった。

このように、現在、高い収容率を維持している（あるいは高い収容率に転じた）大学の内実に詳細に迫ることは、岐路に立つ女子大学の意義やその行く末を考えていくための重要な手がかりを提示すると考えられる。また、2020年代に新設された②北海道武蔵女子大学や③名古屋柳城女子大学の分析や、2025年度より共学化する⑰清泉女学院大学、⑱名古屋女子大学の分析など、残された課題は多い。今後、調査および分析を継続していくなかで取り組んでいきたい。

2. 東京の女子大学

(1) 概要

本項では東京都内に所在する女子大学20校を対象とする。なお、募集停止を発表した恵泉女学園大学は今回の分析に含めていない。パンフレットの平均頁数は98頁、最小は16頁（①女子美術大学）、最大は196頁（⑩東京家政大学）であった。学生数は平均3,283人で、最小は1,029人（⑬東京女子医科大学）、最大は6,652人（③大妻女子大学）であった（表2）。

1) 所在地

今回分析対象とした20校のうち、23区にある学校は15校（文京区3、千代田区2、世田谷区2、杉並区2、新宿区2、渋谷区1、品川区1、板橋区1、千代田区1）、23区外が5校（日野市1、稲城市1、調布市1、小平市1、国立市1）であり、多くは23区内に立地する。都市コードは1の人口50万人以上が15校、2の20万人以上が2校、3が3校である。

⑤実践女子大学（渋谷、日野）、③大妻女子大学（千代田、多摩）、⑱津田塾大学（渋谷、小平）など都心と郊外にキャンパスを持つ大学もある。男子学生を一部の学部で受け入れることを表明した⑪東京家政学院大学は、アクセスの良い町田キャンパスで新学部「生活共創学部」を作った。なお、⑯学習院女子大学は令和5年7月に、学習院大学に統合する計画を発表している（令和8年4月より）。

2) 設置者・設立年

国立は①お茶の水女子大学1校のみである。設立年は、1951年までに設立された学校が12校、1952年から1974年に設立された学校が6校、1975年以降に創立された学校が2校であり、大半が1951年以前に創立されている。偏差値別に並べた時、上位5校の平均創立年数は1949年、中位10校は1955年、下位5校は1970年であり、創立が早いほど偏差値も高い傾向があることが伺える（ $r=-.37$ ）。

表 2 対象校の基礎情報

No.	市区	設置区分	学校名	短大の有無と 冊子の兼別	学部数 (2024.5時点)	学科数	在籍者数 (2023.5時点)	設立年	収容率	偏差値	宗教的背景 の有無	総頁数
①	文京区	国	お茶の水女子大学	四	3	14	2,039	1949	109	60		129
②	文京区	私	跡見学園女子大学	四	4	8	3,612	1965	93	38		113
③	千代田区	私	大妻女子大学	四	7	13	6,652	1949	103	44		162
④	千代田区	私	共立女子大学	四	6	10	5,639	1949	116	46		162
⑤	日野市	私	実践女子大学	四	3	7	4,172	1949	112	44		76
⑥	世田谷区	私	昭和女子大学	四	6	15	6,430	1949	105	50		129
⑦	杉並区	私	女子美術大学	四	1	4	2,734	1949	111	43		16
⑧	渋谷区	私	聖心女子大学	四	1	8	2,389	1948	117	40	有	85
⑨	品川区	私	清泉女子大学	四	1	2	1497	1950	96	43	有	86
⑩	板橋区	私	東京家政大学	四	6	13	6,278	1949	102	43		196
⑪	千代田区	私	東京家政学院大学	四	2	2	1,511	1963	73	38		46
⑫	杉並区	私	東京女子大学	四	1	6	3834	1948	108	50	有	111
⑬	新宿区	私	東京女子医科大学	四	2	2	1,029	1952	101	51		26
⑭	文京区	私	日本女子大学	四	7	16	6,197	1948	103	53		117
⑮	世田谷区	私	日本女子体育大学	四	1	4	2,038	1965	94	35		99
⑯	新宿区	私	学習院女子大学	四	1	3	1,588	1998	110	46		66
⑰	稲城市	私	駒沢女子大学	四	5	7	1,952	1993	90	39	有	90
⑱	調布市	私	白百合女子大学	四	2	6	1,708	1965	90	39	有	84
⑲	小平市	私	津田塾大学	四	2	6	3126	1948	113	48		115
⑳	国立市	私	東京女子体育大学	四	1	1	1,227	1962	85	35		61

なお、学長性別（1 = 男、2 = 女）で見ると、偏差値上位 5 校では女性学長が多い傾向にある（上位 1.6、中位 1.3、下位 1.2、 $r=0.36$ ）。また、創立年が早いほど女性学長が多い（1951 年まで =1.5、1952 - 1974 年 =1.2、1975 年以降 =1.0、 $r=-0.39$ ）。

3) 併設校・宗教的背景・学部数

ほとんどの学校が附属中高を有している。宗教的背景を見ると、多くは非宗教系であった。

表 3 偏差値ごとの宗教的背景の割合

偏差値	1 カトリック	2 プロテスタント	3 仏教	4 非宗教系
下位 5 校	0 (0%)	0 (0%)	1 (20%)	4 (80%)
中位 10 校	3 (30%)	0 (0%)	0 (0%)	7 (70%)
上位 5 校	0 (0%)	1 (20%)	0 (0%)	4 (80%)

偏差値が高いほど学部数も多く、学部数の平均は、上位校 3.4、中位校 2.8、下位校 2.2 であった。学部数の平均は 2.8 学部で、最小は 1 学部（⑦、⑧、⑨、⑫、⑭、⑯、⑳）、最大で 6 学部（④、⑥、⑩）であった。

最も多いのは人文科学科（15 校）、次に社会科学系（13 校）、国際関係（11 校）、教育（10 校）と続く。

理学系学部は 4 校（①お茶の水女子大学、⑫東京女子大学、⑭日本女子大学、⑲津田塾大学）、工学系学部は 7 校（①お茶の水女子大学、③大妻女子大学、④共立女子大学、⑤実践女子大学、⑥昭和女子大学、⑭日本女子大学、⑲津田塾大学）、保健系学部は 4 校（④共立女子大学、⑩東京家政大学、⑬東京女子医科大学、⑰駒沢女子大学）であった。農学部はゼロであった。全国的には農学部に在籍する女子学生が半数弱いることを踏まえれば、東京の女子大学では農学部を設置しないという特徴が見られた。

一方で、データサイエンスを切り口として工学系の学科を設置する大学も見られた（①お茶の水女

子大学文化情報工学科、③大妻女子大学データサイエンス学科)。

表4 全国の大学学部別の女子学生の割合

全国	合計	人文科学	社会科学	理学	工学	農学	保健	家政	教育
男女合計	2,632,775	355,850	840,135	81,675	383,912	79,066	349,679	68,481	184,703
女子割合	45.7%	64.3%	36.7%	27.9%	16.1%	46.1%	63.5%	90.4%	59.2%

令和5年度学校基本調査 高等教育機関 表10「関係学科別 学科数」より筆者作成

(2) ケース分析

偏差値順に東京の女子大学を並べた時、経営方針について見ると、上位校は「1. 伝統・革新両方重視型」「2. 伝統重視型」が明確にわかるが、中位校は「4. 残余型」として明確さに欠け、下位校は各校で経営方針にばらつきが見られた。そこで、パンフレットでのアピールと偏差値や学生数、定員充足率の関係をより詳しく見るために、偏差値、学生数、定員充足率のそれぞれの項目で上位5校、中位4校、下位5校を選び、複数の項目で名前の挙がる大学について分析を行うこととする。その結果、上位大学として④共立女子大学、⑥昭和女子大学、⑭日本女子大学を、中位大学として⑩東京家政大学、③大妻女子大学を、下位大学として①跡見学園女子大学、⑪東京家政学院大学、⑰駒沢女子大学、⑳東京女子体育大学を分析対象(表の○印)とした。なお、これらはあくまでも学生数などの観点で見た分類であり、各大学で懸命に取り組まれている教育の質や教職員の努力を評価するものではない。

表5 ケース分析の対象校

上位大学

偏差値	SS	学生数	人	定員充足率	%
お茶の水女子	60.0	大妻女子	6652	聖心女子	116.5
○日本女子	52.5	○昭和女子	6430	○共立女子	115.6
東京女子医科	51.3	東京家政	6278	津田塾	113.3
東京女子	50	○日本女子	6197	実践女子	111.9
○昭和女子	50	○共立女子	5639	女子美術	111.1

中位大学

偏差値	SS	学生数	人	定員充足率	%
清泉女子	42.5	お茶の水女子	2039	○東京家政	102
○東京家政	42.5	聖心女子	2389	○大妻女子	103.3
○大妻女子	43.8	女子美術	2734	日本女子	103.4
実践女子	43.8	津田塾	3126	昭和女子	105.2

下位大学

偏差値	SS	学生数	人	定員充足率	%
日本女子体育	35	東京女子医科	1029	○東京家政学院	72.6
○東京女子体育	35	○東京女子体育	1227	○東京女子体育	85.2
○跡見学園女子	37.5	清泉女子	1497	○駒沢女子	89.5
○東京家政学院	37.5	○東京家政学院	1511	白百合女子	89.9
○駒沢女子	38.8	学習院女子	1588	○跡見学園女子	93.1

1) 上位大学

④共立女子大学

封筒に「リーダーシップの共立」と記載されており、自大学のブランディングとして「リーダーシップ」が明確に打ち出されている。桂由美氏の出身校であり、池上彰氏が客員教授を務める。「女子大学ならではの（人による）手厚い支援」（教学、就職など）がアピールされている。「日本の中心で、社会の担い手となる女性を育む」ことが女子大学の意義として捉えられており、「リーダーシップ教育を軸に、社会で生きていくための力を一人ひとりに授ける大学」（学長メッセージ）とある通り、「実社会に即応した教育を基盤に共に助け合うこと」「他者と協力し、他者のリーダーシップを引き出し課題解決に取り組むこと」がアピールされている。木漏れ日の下で語り合う学生を表紙にしたパンフレットでは、最初にリーダーシップ教育について説明があり、リーダーシップを「他者と協働して目標達成を目指す力」と定義してそれぞれの学部学科でどのようにリーダーシップを身につけることができるかが説明されている（pp.11-14）。次に、「女子大学ならではの手厚い支援」（pp.15-20）が紹介されている。

⑥昭和女子大学

「変わる、を変えない」がキャッチフレーズであり、坂東眞理子総長は、第5代理事長で総理府（現内閣府）で国女性政策を推し進め、2007年には『女性の品格』がベストセラーになった。家族のためや誰かのためでなく、芯を持った女性として社会に生きることの大切さを訴えた著書の通り、学長メッセージでもグローバルビジネスにおいて「働く力をつけるための女子教育」が主張されている。スカイブルー一色の写真など何もない表紙のパンフレットと共に、2025年から新設される国際学部のパパンフレットが同封されていた。海外大学と提携したダブル・ディグリー・プログラムや、多文化を学ぶこととして派遣留学者数が979名、地域や企業の課題に向き合うこととして145のプロジェクト数などがアピールされている。各学科で4頁程度の紹介がされているオーソドックスな作りであるが、最後に卒業生インタビューが4頁ある。

⑭日本女子大学

ここ数年で学部新設を続け様に行っており、国際文化学部（2023年度）、建築デザイン学部（2024年度）、食科学部（2025年度予定）を新設している。また、トランスジェンダー学生の受け入れを2024年4月より認めている。新紙幣の渋沢栄一も校長を務めており（1931年）、キャッチフレーズは「変革を先駆ける」である。女子大学の意義について「女子大学というのびのびと自分を磨くことができる環境だからこそ、見えてくる課題もあるはずです。」（学長メッセージ）と述べられており、「（異文化間で生じる葛藤）を乗り越えるべく、他者を理解する広い見識、異なる考えを調整するコミュニケーション能力、それらを統合し発信する力を身につけていただきたい」（学長）と述べられている。全体として、「変化する世界における女性のリーダーシップによる新たな価値創造に期待している」「異文化間で生じる葛藤を乗り越える力を持つ人を育てる（新たな時代のための真の多様性）」が特徴として見られる。

パンフレットの表紙は、日の丸を思わせる白と赤が基調となっており、全体で117頁。2021年に川崎から目白にキャンパスを移転した。近くに学習院大学がある。定員充足率は103.4%。アピールされている就職先は、清水建設、中外製薬、総合コンサルティングファーム、日本ハム、建築都市設計事務所、三越伊勢丹、三井住友海上保健、LITALICO、日本マイクロソフトである。「女性」同士が学問を通して力をつけ合うことを目指したJWUキャリア科目があり、各分野で活躍する職業人との対話やインターンシップ、自治体や企業と社会課題の解決について取り組む。データサイエンスについても学ぶ（p.18）。

留学制度は、カナダ、アメリカ、ニュージーランド、韓国、フランスを中心として、中国、スウェーデン、台湾、カンボジア、バングラディッシュ、イタリア、ベトナムと複数のプログラムがある。海外の協定大学として、アメリカのウェルズリー大学や韓国の梨花女子大学も挙げられている。

学部は、食科学（食科学、栄養学）、建築デザイン（建築デザイン）、国際文化（国際文化）、家政（児童学、被服、家政経済）、文学（日本、英文、史学）、人間社会（現代社会、社会福祉、教育、心理）、理学（数物情報科学、化学生命科学）の6学部。パンフレットでは、各学部4頁程度で学科の学びが紹介されている。パンフレットの印象としてはオーソドックスな作りである。

上位大学では、全体として女子教育について積極的な役割を担うという姿勢があり、働く力や変化する社会での活躍、グローバル、リーダーシップ、データサイエンスや免許資格が強調されていた。就職先としては博報堂、清水建設、日本銀行などの一部上場企業が並び、中高免の教科数も多い。キャッチフレーズとして共通するのは、「働く」「自立」「世界」「強さ」「変革」「リーダーシップ」などの言葉であった。各大学とも女子大学の意義が明確に伝えられており、女子教育の特質について表現されている。学生支援やキャリア形成を重視した内容が多く含まれており、ビジュアルと情報の両方に配慮しブランドイメージの強化が行われている。個々の大学について見れば、共立女子大学はリーダーシップ教育に重点を置き、他者との協働や支援を基盤とした教育がアピールされていた。昭和女子大学は実務的なプログラムや国際的な視点が前面に出ており、グローバル教育がアピールされていた。日本女子大学は新学部設置や時代に即した対応を進めつつ、オーソドックスな作りによる安心感や内容の幅広さがアピールされていた。

2) 中位大学

③大妻女子大学

アルファベットで大学名を記した表紙のパンフレットである。「学び働き続ける自立自存の女性を育成する」がキャッチフレーズで、女子教育に積極的な役割を果たすことが学院の使命として挙げられている。家政学部、文学部、社会情報学部、人間関係学部、比較文化学部に加え、データサイエンス学部の開設がアピールされている。

⑩東京家政大学

真っ白な表紙に「大学で何を学び卒業後どう生きるか」と書かれた大学案内に加え、卒業生のストーリーブック（47頁）があり、資格取得が前面に出て専門学校のようなイメージである。産学官連携活動も積極的に行われている。女性未来研究所、看護・児童福祉など地域に密着した就職先。「専門を生かすために必要な汎用性ある教育」（学長）が重視され、「変化する社会の中で臨機応変に活躍できる女性を育成」が女子教育の意義としてアピールされている。児童学部（児童、初等教育）、栄養学部（栄養、管理栄養）、家政学部（服飾美術、環境共生、造形表現）、人文学部（英語コミュニケーション、心理カウンセリング、教育福祉）、短期大学部（保育科、栄養科）のある板橋キャンパスと、健康科学部（看護、リハビリテーション）、子ども支援学部（子ども支援学科）のある狭山キャンパスの2キャンパス。

両大学に共通する点は、女子大学の意義として自立した女性の育成に焦点が当てられ、社会での活躍を支えるという教育理念がアピールされている点である。データサイエンス学部（大妻女子大学）や、子ども支援学部（東京家政大学）など、新しい学問領域への対応も見られた。広い教養や自由、リベラル・アーツやグローバルな視点が強調されており、資格取得や実社会での活躍を具体的に示し、学生が卒業後をイメージしやすい内容となっている。就職先は、丸紅や小売チェーン店、幼稚園・小学校教諭や保育士、栄養教諭がアピールされていた。個々の大学について見ると、大妻女子大学はシンプルなデザインにより「自立自存」に重点を置きリベラル・アーツ的な学びが強調されてい

るのに対し、東京家政大学は卒業生ストーリーブックにより具体的な社会人像を示し、実学や汎用性のある教育をアピールしていた。両校のパンフレットからは、キャリア形成の具体的な提示により、多様な学びを提供する姿勢や卒業後の進路や資格取得を示すことにより教育の成果を裏付けようとする構成が特徴として見られた。

3) 下位大学

⑩跡見学園女子大学

「今をひらく未来を選ぶ」をキャッチフレーズとして、地域や企業との連携、国外留学がアピールされている。創設は1965年。建物の外観が2枚写された表紙のパンフレットで、社会に役立つ教養や、文京区の魅力発信プロジェクトが紹介されている。イギリスやフランス、台湾、ドイツ、韓国への留学プログラムもある。「日常のあらゆる場面で切磋琢磨しあうことで、共感する力、協働する力、コミュニケーションする力のもとより、女性だけでさまざまな課題に取り組み、解決する経験を通してリーダーシップが育ちます。」「女子大学にはジェンダーバイアスがないので、自分らしく可能性を伸ばせる」(学長)と、女子大学の意義がアピールされている。学部は文学部、マネジメント学部、観光コミュニティ学部、心理学部の4学部。学生数が3612人と大規模な割に、上位大学に見られるような新しい学問領域に関する学部がないことが、定員充足率が100%に満たない要因となっているかもしれない。心理学部が牽引役ではあるが、理学や工学関係の学部を新設するにしても、これら学部での学修には一定の理数系科目への関心や学力基盤が必要となるため、志望学生の偏差値とのミスマッチが起こる可能性も生じる。こうした点にも、ジェンダーの観点から見た日本における義務教育段階からの理数系教育の課題が見て取れる。

⑪東京家政学院大学

創設1963年と中盤校に位置づく。千代田区、町田と都心にキャンパスがある。キャッチフレーズは「くらしのことから、社会をよくする」である。「家政学を超えていく」と書かれたパンフレットは46頁と、他大学に比べ少ない。管理栄養士の資格取得が一番のアピールとなっており、一人の学生の1日のキャンパスライフが紹介される構成である。学長メッセージは1/5頁くらいの小さなスペースである(p.22)。学部は現代生活学部(現代家政学科)、人間栄養学部(人間栄養学科)の2学部であるが、男子学生を受け入れる生活共創学部(生活共創学科、こども教育学科)が町田に開設される。

⑫駒沢女子大学

「わたしの「好き」が、わたしを動かす」をキャッチフレーズとして、共創文化学部(国際日本、人間関係、心理)、観光文化学部(観光文化)、空間デザイン学部(空間デザイン)の3学部を新設。女子大学の意義についてはあまりアピールされておらず、「学生一人ひとりのより良い未来に向けて」(学長)とあるのみ。建学の精神は、「新しい文化の創造的担い手となる人間性豊かな現代女性」。真っ直ぐに右を見る学生が表紙のパンフレットでは、学部新設が大きくアピールされている。人間健康学部(健康栄養学科)、看護学部(看護学科)、短期大学(保育科)でも、資格取得支援のための教学体制の変更が計画されている。

⑬東京女子体育大学

1962年創設、キャッチフレーズは「一生ものの、姿勢をつくる」である。「腰伸ばせ」という創立者の言葉が大切にされ、競技者・指導者育成に重点が置かれる。「すべての活動において、女性リーダーの育成につながる」(学長メッセージ)と、女子教育と女性リーダーの育成が言われるが、具体的にどのようなプログラムがあるのかは明記されていない。女子教育についても明記されている箇所は見当たらず、建学の精神である「心身ともに健全で、質素で誠実、礼儀正しい女子体育指導者の育

成」から読み取るしかない。「運動文化伝承の担い手として、凛とした次世代のリーダーとなる人材を育成」「オリンピック選手の輩出」がアピールされている。様々な競技者が走る表紙のパンフレットを開くと、教育スローガンとして「極匠伝凛」の漢字が並び、技術力を磨くこと、指導のプロと現場で学ぶこと、学び合い教え合うこと、伝統が創る空気をまとう、ことがアピールされている。学部は、体育学部（体育学科）のみで、併設校として短期大学（こどもスポーツ教育学科）がある。学科の中で、「教職体育学」「スポーツ健康学」「コーチング学」「スポーツマネジメント学」専攻があるが、専門学校との違いを明確にしづらい部分がある。

ここで下位大学として位置付けた大学は、先に述べたようにあくまで学生数などで分類した位置付けであり、教育活動の質や努力を評価したものではない。分類する際に下位に位置づいた要因の一つは、それぞれの大学の領域特化性も影響している。高い専門性が必要な学部であることから学生数が少ない東京女子医科大学や、東京女子体育大学と、学部の相対的な魅力低下から学生数や充足率が低下している東京家政学院など下位校に位置づいた背景は様々である。その上で、全体として、女子教育については学則や建学の精神の中でしか触れられておらず、女子教育に関する記述は見られるものの、具体的な取り組みや成果の提示において、上位大学との差別化が難しい状況が見られた。また、「受け継ぐ」「くらし」などのキーワードから、内実は異なるにせよ、保守的な印象も免れない。それを好む層も一定数いるが、18歳人口の減少や共学大学との競合により減少する入学生数をどのように回復するかが課題となる。今後の学部新設によりどの程度の効果があるのかを継続して見ておきたい。

（3）考察

東京の女子大学の多くは23区内にあり、都市部に集中していた。多くの大学は1951年以前に創立されており、早くに創立された女子大学ほど偏差値が高く、女性学長も多い傾向にあった。偏差値が高いほど学部数も多く、人文科学系や社会科学系の学部が多い中で、データサイエンス系学科など、新たな学科を設置する動きが見られた。偏差値帯ごとの経営方針の特徴を見ると、上位校では「伝統・革新両方重視型」が多い一方で、中位校では経営方針がしばしば明確でなく、下位校では学校によって経営方針にばらつきが見られた。そこで、偏差値、学生数、定員充足率で上位、中位、下位のケース校を抽出し、パンフレット分析を行った。

ケース分析を通じて見たことは、上位校では「リーダーシップ」「変化し続ける」ことを明確に打ち出していることがわかった。留学プログラムや海外大学との提携など、グローバルな世界での新たな価値創造を目指す女性リーダーの育成が目指されており、トランスジェンダー女子の受け入れも行っていた。「働く力」「自立」をキーワードに、データサイエンスや資格取得、就職支援が行われていた。中位校でも「学び働き続ける」というメッセージや、データサイエンス学部の設置など、上位校と同様の動きが見られた。しかしながら、偏差値帯が異なることで、保育職や教職などの免許資格を用いた就職や、地域密着型の就職支援などより現実的、堅実なキャリア形成をアピールしている様子が見られた。下位校では、「くらし」や「わたし」「受け継ぐ」などの言葉が見られた。これらは大切な言葉ではあるが、やや保守的にも響く言葉である。上位大学のアピールする「変化し続ける女性リーダー像」とは異なるベクトルとなっている。もちろん、こうした言葉が響く受験者層もいる。つまり、ここから女子大学の二極化を読み取ることができる。上位大学は「リーダーシップ」「自立」「変革」などの明確なキャッチフレーズを掲げて、それを学部新設などの形ある動きで訴求し、ブランドイメージを形成している。また、学部の多様化と新設により競争力を高めている。しかし、同じような経営を中位大学、下位大学が行っても、入学しようとする学生の関心などとのズレが生じる可

能性がある。地域と密着した実践的な学びの場の提供や産学官連携や、資格取得支援の強化などは中位大学、下位大学の取り得る経営戦略であるが、教職員の多忙化により、丁寧にプログラムを構築、指導し成果につなげることは簡単ではない。女子大学の中でも、美術や医学、体育など特定の領域でオンリーワンの位置付けをしている大学があることを踏まえれば、自分たちの強みを見直し、特定領域での強みをアピールすることでブランドを構築していくことが求められる。

3. 西日本の女子大学

(1) 対象校とその特徴

ここで見る「西日本」の女子大学とは、近畿・中国・四国・九州にある女子大学30校のことである。(表6)

うち1校(⑫)は来年度の募集を停止しているため、29校を分析の対象とした。地域、都道府県別では、近畿地方17校(京都府6校、大阪府4校、兵庫県6校、奈良県1校)、中国・四国地方4校(広島県3校、愛媛県1校)、九州地方8校(福岡県6校、熊本県2校)である。設置区分は国立が1校(⑮)、公立が1校(⑮)、その他27校は私立である。学部数は1～12学部とさまざまであるが、半数以上が3学部以下である。具体的には1学部設置の大学が4校、2学部が5校、3学部が8校、4学部が6校、5学部が2校、6～8学部が各1校、12学部が1校であり、1校が突出して多くの学部を持つ総合大学である(⑮)。短大を有する大学は9/29校である。設立年は、1951年以前の「伝統校」が9校、1975年以降の「新設校」は11校である。九州地方に比較的新しくできた大学が多いのが特徴である。

表6 対象校の基礎情報

No.	地区	所在県	設置区分	学校名	短大の有無と 冊子の兼別	学部数 (2025.4時点)	学科数	在籍者数 (2023.5時点)	設立年	収容率	偏差値	宗教的背景 の有無	総頁数
①	近畿	京都	私	平安女学院大学	無	2	2	551	2000	74.5	35	有	49
②			私	京都女子大学	無	7	10	6,016	1949	109.9	48.75	有	134
③			私	京都光華女子大学	兼	3	7	1,704	1964	85	36.25	有	89
④			私	同志社女子大学	無	6	11	6,346	1949	105.1	46.25	有	99
⑤			私	京都ノートルダム女子大学	無	2	5	1,099	1961	81.8	35	有	68
⑥			公	京都華頂大学	兼	2	4	408	2011	72.9	35	有	62
⑦		大阪	私	大阪樟蔭女子大学	無	3	8	2,224	1949	79.7	36.25		78
⑧			私	梅花女子大学	無	4	9	2,052	1964	103.6	37.5	有	118
⑨			私	千里金蘭大学	無	3	3	830	2003	86.5	38.25		65
⑩			私	大阪女学院大学	兼	1	1	436	2004	70.8	BF	有	26 (別冊34)
⑪		兵庫	私	甲南女子大学	無	5	10	3,894	1964	97.8	41.25		126
⑫			私	神戸海星女子学院大学	無								
⑬			私	神戸女子大学	兼	5	10	2,987	1966	80.7	43.75		98
⑭			私	神戸松蔭女子学院大学	無	3	6	1,606	1966	70.4	37.5	有	98
⑮			私	神戸女学院大学	無	4	5	2,003	1948	88.4	41.25	有	85
⑯			私	園田学園女子大学	無	3	5	1,201	1966	68.6	40		90
⑰			私	武庫川女子大学	別	12	20	9,245	1949	95.7	45		122
⑱		奈良	国	奈良女子大学	無	4	10	2,123	1949	107.2	53.75		70
⑲	中国・四国	広島	私	ノートルダム清心女子大学	無	4	8	1,763	1949	86.8	47.5	有	80
⑳			私	広島女学院大学	無	2	5	950	1949	72	37.5	有	66
㉑			私	安田女子大学	無	8	18	5,292	1966	95.4	40		90
㉒		愛媛	私	松山東雲女子大学	兼	1	1	323	1992	70.2	35	有	74
㉓	九州	福岡	公	福岡女子大学	無	1	3	1,019	1950	106.1	48.75		52
㉔			私	九州女子大学	別	4	4	1,264	1962	91.6	BF		70
㉕			私	筑業女子学院大学	無	3	6	2,382	1988	83.7	36.25	有	125
㉖			私	福岡女子学院大学	無	3	7	2,135	1990	93.5	35	有	110
㉗			私	西南女学院大学	無	2	5	1,208	1994	77.4	35	有	82
㉘			私	福岡女学院看護大学	無	1	1	429	2008	111.5	BF	有	10
㉙		熊本	私	活水女子大学	無	3	5	989	1981	74.9	35	有	64
㉚			私	尚絅大学	兼	4	6	500	1975	79.8	BF		70

収容率は68.6～111.5%である。収容率が最も低い2校(⑭、⑯)については、来年度から共学化することが発表されており、表紙の大学名も新しい名前に変更されている。偏差値はボーダーフリー(BF)～53.75である。パンフレットの総頁数については、2冊構成の大学(⑩)を除けば、10～134頁であり、学部数が多ければ頁数も多くなる傾向が読み取れる。

(2) 分析結果

本項では、大学案内パンフレットから見えてきた、各大学の特徴をいくつかの視点から記述していく。

1) 学長のメッセージは大学案内のどこに位置付けられているか

大学の「顔」ともいえる学長のメッセージは大学案内のどこに位置付けられているのか、ということに着目した時に、その大学の様子が見えてくるように思えた。トップダウン型の組織なのか、ボトムアップ型の組織なのか、伝統的な組織なのか、革新的な組織なのか、などである。大学案内であれば、学長は大学の「顔」なのだから、大学案内の初めの部分に現れるはずだと思いながら大学案内を眺めていた。しかし、今回29校の大学案内を見てみると、そうとは限らないことがわかる。具体的に言うと、学長メッセージが初めのほうに位置しているのは29校中17校と、半分程度である。逆に、学長メッセージが大学案内の後ろのほうに位置している大学は8校である。残り4校のうち、1校(⑮)はちょうど真ん中あたりに、学生との対話という形で学長が登場し、3校(①、⑥、⑳)は学長のメッセージが見当たらなかった(なお、大学の公式ホームページには学長メッセージを見つけることができた)。

大学案内における学長メッセージの位置と関連がありそうなことの1つが、その大学が伝統重視の大学か、革新重視の大学か、ということである。そのような視点で大学パンフレットを見てみると、大学が歩んできた歴史を前面に押し出し、それを今でも大事に継承していることを強調するような内容が見られ、伝統を重んじていると思われる大学は7校(①、⑩、㉑、㉒、㉓、㉔、㉕)だった。そのうちの5校(㉑、㉒、㉓、㉔、㉕)は、学長メッセージが大学案内の前のほうに現れた。残りの2校のうち1校はそもそも学長メッセージの記載がない大学(①)と最後の頁に29校中唯一、手書きのメッセージが書かれた大学(⑩)である。この2校を一種の「変わり種」とするならば、5校中5校が前の方に学長メッセージを掲載しているという結果である。また、これらの5校には近畿地方の学校は1校も含まれていないことも特徴的である。

一方で、新たな学部や施設を次々と展開していることをアピールする学校は11校(②、③、⑤、⑥、⑦、⑪、⑬、⑭、⑯、㉖、㉗)あった。そのうち学長メッセージが大学案内のはじめに出てくる学校は4校(②、⑦、⑪、⑭)に過ぎず、後ろの方に出てくる学校は5校(③、⑤、㉖、⑬、⑯)、学長メッセージがないものが2校(⑥、㉗)であった。これらの大学に九州地方の学校がないことも特徴のひとつと言えるだろう。なお、伝統を重視しつつ、革新的な試みもアピールする大学は8校(④、⑧、⑨、⑮、⑰、⑱、㉘、㉙)あったが、それらは皆、学長メッセージは初めのほうに登場していた。

2) 女性教育を前面に押し出す大学

以上のことを踏まえて、ここで注目したいのは、革新重視の大学で、学長メッセージが冒頭に現れる大学4校である。学生を前面に押し出し、学長が影を潜めるような大学ではなく、学長がリーダーシップをとって、大学改革をしていくことが伺われる大学である。そのうち1校は共学化する神戸松蔭女子学院大学なので、ここでは取り上げないことにする。残りの3校、京都女子大学、甲南女子大学、大阪樟蔭女子大学を取り上げる。どちらも関西を代表する人気の高い大学である。なお、これら

2校はいずれの学長も女性である。

京都女子大学の竹安栄子学長のメッセージのタイトルは「あなたが気づき、社会を変える。『女性らしさ』から、『自分らしさへ』。」である。学長メッセージの中で、学生に「しなやかさ」や「たおやかさ」を求める大学とは、明らかに一線を画すようなタイトルである。メッセージには次のような文章が書かれている。一部を抜粋する。

みなさんをご存知でしょうか。

私たちが気づかないうちに、男性と女性の間の格差を「当たり前」とする社会の中で生きていることを。

どうぞ、思い起こしてみてください。あなたのご自宅や友人宅で、いつも家事をしている人は？ニュースや新聞の中で、政治家や企業の役員として出てくる人は？

客観的な事実としても、日本のジェンダー・ギャップ指数は世界 146 ヶ国中 125 位（2023 年）。先進諸国やアジアの中で最下位です。

（中略）

では一体どうすれば、この国でずっと「当たり前」とされてきた、ジェンダー格差を是正できるのでしょうか。ただ単に社会の仕組みや制度を変えるだけでは、十分とは言えません。女性たちの方からも、自らの意識や役割を変えていくための特別な教育が必要なのです。

まずは、男性に対して無意識のうちに一歩ゆずっていた自分や、社会の不公正に気づくこと。そして、男性の眼を気にすることなく、自らの考えを積極的に発言し、主体的に動いていく心地よさを知ること。そうした学びの場を提供できることが、男性のいない女性だけの大学、つまり女子大学の重要な存在意義のひとつだといえるでしょう。

（「京都女子大学」大学案内 p.14 から一部抜粋。下線部筆者）

このように日本のジェンダー・ギャップの問題を明示的に指摘し、それを乗り越えるための教育機関としての女子大学の意義が述べられている。ここで書かれているようなことを意識しながら女子大学を選択するような受験生を求めているのである。そのような受験生は残念ながら一握りしかいないだろう。少なくとも筆者が勤務する大学で同様の説明をすると、多くの学生は竹安学長が訴えているような現状を「ご存知でない」ことに気づかされる。竹安学長が訴える「女子大学の重要な存在意義」は、京都女子大学以外の女子大学にも当てはまる。しかし、これほどまでに正面からこの問題を投げかける大学は数少ない。

もう 1 校の甲南女子大学もかなり特徴的である。秋本典子学長のメッセージは上述の竹安学長のそれと比較して控え目ではあるが、大学のカリキュラムは竹安学長が訴える内容と親和性の高いものを目玉としている。具体的には、全国的女子大学で初という「全員発揮型のリーダーシップ教育」を看板に掲げていたり、もう一つの看板である全学共通科目の 3 つの特徴の 1 つ目に「女性教育」を挙げていたりする。ここでの「女性教育」は「女性」にかかわる多彩な授業を通じて、女性が置かれている状況を歴史的・社会的な背景から理解し、自分らしい生き方を選択する力を養う」ことを目的としている（甲南女子大学大学案内 p.11）。また、ここに記述されている「多彩な授業」とは、具体的には「ジェンダー論入門」「女性と家族」「女子学」「女性の歴史」「女性とコミュニケーション」「国際社会とジェンダー」である。これらを学ぶ「女性教育」は、「初年次教育」「キャリア教育」と並んで、大学が全学をあげて取り組む教育となっているのである。

ところで、女性教育を前面に押し出す大学であっても、京都女子大学や甲南女子大学とは対照的な大学もある。たとえば、熊本県の尚絅（しょうけい）大学である。この大学の大学案内も学長のリーダーシップが感じられるデザインとなっている。山縣ゆり子学長は、メッセージに「専門的職業人として社会で活躍できる、学識と教養を兼ね備えた魅力ある女性の育成を目指しています」と記している（尚絅大学大学案内 p.6）。甲南女子大学と同様に、「女子教育」を大学教育カリキュラムの特徴の1つに掲げている（「女性」と「女子」の言葉の選択の違いも興味深い）。そこでは、「環境の変化を十分に認識し、古き良き伝統を育みつつ、『智と徳を兼ね備え社会に貢献し得る女性の育成』を目指している」とある。古き良き伝統を育む女性が、ここでいったい何を意味しているのかは定かではない。だが、「女子教育」の講座の中には、「メイクアップ講座」や「秘書実務」「美容と健康」なども並ぶ（同 p.3）ことから、その女性（女子）像は美容を意識し、秘書として誰かを助ける役割を担うことが期待されるような存在であるということが、講座名からは想像される。もう1校の大阪樟蔭女子大学はこのような教育をアピールする大学の一つに数えることができるだろう。「美しくあれ、私の人生」というキャッチフレーズやく3つの美>として、「知性美」「情操美」「品性美」という言葉がパンフレットの1頁目に並ぶ。なお、学長は男性である。

3) 女子大学の改革の速度

さて、近畿地区、中国四国地区、九州地区の大学案内を見ていて気付いたことが、もう1つある。それは改革の速度の地域間格差がある。端的に言えば、関西はスピードが速く競い合っているように見えるが、四国、九州は随分とのんびりとしているように見える、ということである。それは、(1)で述べたように、近畿地区に伝統重視の大学が見られず、一方で、九州地区に革新重視の大学が見られないこととも関連する。2025年度に共学化をする予定の園田学園女子大学や神戸松蔭女学院大学（2025年度よりそれぞれ園田学園大学、神戸松蔭大学となる）をはじめ、近畿地区の女子大学の改革の速度は速い。それだけ競争が激しく、学生募集をめぐってしのぎを削っていることが想像できる。改革の中身としては、学部・学科の増設、特に、理系分野が増加している。2022年に日本の女子大学で初めて工学部工学科を増設した奈良女子大学、構想中ではあるが、生命環境学部を設置予定の神戸女学院大学、環境共生学部を設置予定の武庫川女子大学などである。これらの改革を女性が理系学部に進学することの促進を目指していると捉えるのか、もしくは、共学化の準備と捉えるかは意見が分かれるところかもしれない。今後、女子大学の共学化は進むものと思われるので、注視していくほかはない。

一方で、改革の速度が遅く、牧歌的に見えるのは、四国、九州地区の女子大学である。これらの女子大学の大学案内の中には、タウン情報誌のような、女子大学生たちや地域の人々、教職員の笑顔が数多く掲載された、「ふんわり」とした雰囲気のある大学案内さえ見受けられる。近畿地区と四国・九州地区の女子大学の違いは一体どこからきているのか、その他さまざまなデータを用いて分析していく必要がある。

もちろん、改革を次々に打ち出している大学のほうが大学教育の価値が高いということを、ここで訴えたいわけではない。近畿地区の大学の数々の「新しさ」は実は表面上のパフォーマンスなのかもしれないし、補助金を獲得するための手段にすぎないのかもしれない。大事なことは、学生がそこで何を学ぶかであり、どのような経験をするか、ということであって、改革の有無を大学の評価に直線的につなげることは慎重にならねばならないだろう。なお、本節の分析は数の限られた西日本の女子大学の大学案内から読み取れたことにすぎず、限定的であることに注意したい。ここで述べた視点で、日本全国の女子大学を見たらどのようにみられるかは、また今後検討したい。

4. 共学化した女子大学

本項では、今世紀に入ってから共学化した、かつての女子大学（以下、「共学化校」）を対象として選び、前項までと同様に、大学パンフレットに記載されている情報についての整理・分析を行う。

具体的に対象とするのは、2001 年後から 2023 年度にかけて共学化を果たした大学、合計 23 校である。それらの大学の名称とプロフィールは、表 7 にまとめた通りである。

(1) 共学化校のプロフィール

まず、表 7 にもとづいて、全体の概要を記述しておこう。

- ① 23 校のうち、2000 年代に共学化した大学は 16 校と多くを占める。対照的に、10 年代に共学化した大学は 4 校にとどまる。20 年代に入ってから、リストアップされているのは柴田学院・鹿児島純心・神戸親和の 3 校であるが、その後本年（2024 年）には桜花学園が、25 年には清泉女学院・名古屋女子・神戸松蔭女子学院・東京家政学院・園田学園女子が、それぞれ共学化する予定である。20 年代に入り、共学化の波はきわめて大きくなりつつある。

表 7 対象校の基礎情報

共学化年	地区	所在県	設置区分	学校名	学部数 (2025.4時点)	学部数 (2025.4時点)	設立年	偏差値	総頁数	学生定員	充足率
2001	東京	東京	私	聖路加国際大学	1	1	1964	57.5	38	100	100.0
2001	中国	山口	私	梅光学院大学	2	2	1967	35.0	70	310	76.8
2002	東京	東京	私	杉野服飾大学	1	3	1964	35.0	78	280	74.0
2003	近畿	大阪	私	帝塚山学院大学	3	4	1966	42.5	93	370	111.9
2003	中国	岡山	私	美作大学	1	3	1967	40.0	98	210	107.6
2003	東京	東京	私	武蔵野大学	13	21	1965	45.0	104	2550	99.0
2003	中国	岡山	私	就実大学	5	7	1979	37.5	106	715	115.7
2004	四国	愛媛	私	聖カタリナ大学	2	3	1988	35.0	69	250	92.4
2004	関東	神奈川	私	松蔭大学	4	9	2000	BF	74	500	47.7
2005	関東	茨城	私	日本国際学園大学	1	1	1996	35.0	46	200	30.0
2005	東京	東京	私	文京学院大学	4	10	1991	35.0	107	1070	80.0
2005	近畿	京都	私	京都橘大学	9	15	1967	42.5	103	1641	109.3
2006	近畿	大阪	私	大阪大谷大学	4	7	1966	40.0	98	503	80.8
2007	中部	愛知	私	東海学園大学	6	6	1981	32.5	87	930	85.0
2009	中部	愛知	私	至学館大学	1	4	1963	40.0	78	390	104.5
2009	中国	岡山	私	山陽学園大学	3	5	1994	BF	81	218	77.5
2012	東京	東京	私	文化学園大学	3	6	1964	35.0	139	850	94.1
2015	東京	東京	私	東京純心大学	1	1	1996	BF	26	80	107.5
2019	中国	広島	私	広島文教大学	2	5	1966	37.5	80	390	105.4
2019	九州	長崎	私	長崎純心大学	1	3	1994	BF	57	280	89.3
2021	東北	青森	私	柴田学園大学	1	3	1969	BF	62	100	101.0
2023	九州	鹿児島	私	鹿児島純心大学	2	3	1994	BF	66	170	91.8
2023	近畿	兵庫	私	神戸親和大学	2	4	1966	35.0	90	375	63.1

- ② 地域的な偏りをみると、東京が最も多く 6 校、続いて中国が 5 校、近畿が 4 校となっている。東北・関東・中部・四国・九州にも 1～2 校あり、比較的まんべんなく分布していると言えるだろう。
- ③ 規模を見てみると、明らかに小規模校が多いことがわかる。学部数でみると、1～3 学部から構成される大学が 16 校、全体の 7 割を占める。そのうち単学部の大学は、聖路加国際（看護学部）、杉野服飾（服飾学部）、美作（生活科学部）、日本国際学園（経営情報学部）、

至学館（健康科学部）、東京純心（看護学部）、長崎純心（人文学部）、柴田学園（生活創生学部）の8校である。また、ひと学年あたり学生定員で見ても、500名以下の大学が16校と、これも全体の7割を占める。特に規模が小さいのは、東京純心の80名、聖路加国際と柴田学園の100名、鹿児島純心の170名などである。逆にいくつか大規模な大学もある。代表的なのが、13学部21学科からなる武蔵野と9学部15学科からなる京都橘である。前者は学生総数1万名以上、後者は6000名以上を擁する総合大学で、「共学化して成功した女子大学」の実例として注目を集めることも多い。

- ④ 偏差値をみると、聖路加国際が57.5と群を抜いて高いことがわかる。聖路加国際病院との緊密な関係をもつ、看護教育の名門であり、特別の存在だと言えるが、その他に50を超える共学化校はない。上に述べた武蔵野が45、京都橘がそれに続く42.5となっているが、それらも含め共学化校の偏差値は概して高くない。BF（ボーダーフリー）となっている大学も6つ存在している。右端の欄に掲載した充足率（2023年の値）で見ても、100%に届かない（＝定員割れをしている）大学が14校（全体の6割超）に達している。それらの大学は、経営的にはかなりきびしい状況にあると考えてよいだろう。

（2）どんな女子大学が共学化したのか

まずもって共学化という手を打ったということは、そうすべき理由があったからである。大学案内パンフレットという媒体の性格上、それをそこに記載された情報から導き出すことは困難であるが、その最大の理由が、入学者数の減少とそれに伴う経営状態の悪化であったことは容易に想像がつく。

女子教育の振興、さらに遡れば「良妻賢母教育」の推進、を大きな旗頭としてきた女子大学は、戦後社会の歴史の流れに翻弄されることとなった。その対応策・打開策のひとつが「共学化」である。23校のパンフを眺めてみて浮かんでくるのは、共学化した大学の多くは、地方の小さな女子大学であったという事実である。

ある歴史段階まで、女子大学の看板となってきたのは文学部や家政学部であった。文学部を中心に発展してきた大学には、例えば就実や帝塚山学院がある。そこから派生し、教員養成をウリにしてきた大学には、神戸親和や広島文教がある。他方、家政学部を中心に教育を展開してきたのが柴田学園や美作といった大学である。変わり種としては、裁縫系の専門学校から服飾・ファッションをキーワードとする大学に進化した文化学園や杉野服飾がある。

また、宗教とのつながりで言うと、23校中3校を占める純心（東京純心・長崎純心・鹿児島純心）、愛媛の聖カタリナ、岡山の山陽学園などはキリスト教系の女子大学であった。また、武蔵野、大阪大谷、東海学園などは仏教系の女子大学であった。全体としてみるなら、宗教的ルーツをもたない大学の方がマジョリティである。

独自の路線を歩んでいる大学としては、前節であげた聖路加国際やスポーツで名をはせている至学館などをあげることができよう。また、先にふれた武蔵野と京都橘の2大学は、女子大学から「脱皮」し、共学の総合大学化を果たした「出世頭」とみることもできるかもしれない。文京学院や東海学園、就実なども、それに次ぐ規模をもつ大学に成長している。

概括的に言うなら、小さな、地方の女子大学が、生き残りをかけていち早く変身を遂げようとしたのが、共学化校であったと指摘できよう。しかし現状では、定員割れしている大学も少なくなく、苦戦しながらも現状維持しているというのが共通したイメージだと見ることができる。

（３）女子大学であったことの証はあるか

本節での分析の中心テーマとして扱いたいと考えたのが、「女子大学であった過去が、現在の大学案内にどの程度アピールされている（いない）のか」という問いである。そのために、いくつかの作業をしてみた。

最初に見たのが、大学の「沿革」の扱いであった。パンフの冒頭部分にあり、十分に重視されていると判断できるものを「A」（紙面の４頁ほどを費やしている場合もある）、逆にパンフの末尾に申し訳程度につけ付け加えられているものを「E」（１頁のみを割いている）とし、内容に応じA～Eの５段階にレイティングしてみたところ、以下のような分布となった。Aが６校、Bが３校、Cが６校、Dが５校、Eが２校。学長のあいさつと沿革が同じ紙面に掲載されているものも約半分あったが、それらはAからEに広く分布していた。

Aランクの事例として就実をあげておこう。３頁目（見開きの左頁）には「120」という数字が大きくあしらわれ、４頁目（右頁）には、「みらいをてらす就実 120 年の軌跡」という見出しのものに、「去華就実」（きょかしゅうじつ）という建学の精神がうたわれている。さらに、頁をめくって５・６頁目には、120 年の歴史を示す年表といくつもの古い写真がレイアウトされている。前身の実科女学校だったところの写真（図１）がその一つである。「開校３年目後樂園の唯心山に集った全校生徒 500 余名」というキャプションがついている。これだけ自校のルーツを、自信をもって押し出している共学化校は他にはなかった。

対極的に、2024 年に開学された日本国際学園大学（2023 年度までは筑波学院大学）は E ランクだった大学の一つである。最終頁の上段に学長メッセージが、中段に沿革と建学の精神、および創設者のプロフィールが小ぢんまりとまとめられている。ネイティブ講師陣による英語の授業や国際色豊かなキャリアモデルを前面に打ち出すパンフレットの本文とのギャップがいちじるしい。

上記のように、沿革の打ち出しは大学によるバリエーションが大きかったものの、「女子大学であったこと」を大きく打ち出す学校はほぼなかった。大学パンフの主たる読者は、当然受験生である。女子大学であったかどうかという過去は、彼らにとって、いわばどうでもよい情報なのかもしれない。

次に見た「学長メッセージ」についても、状況は同じであった。学長メッセージの内容に、筆者が見出しをつけてみた。以下のようなものである。「試練に立ち向かえる人間力を」（聖路加国際）、「新しい世界を切り拓く能力」（梅光学院）、「ファッションを牽引する専門的職業人の育成」（杉野服飾）、「社会により近い、学生が成長を実感できる大学」（帝塚山学院）、「未来世界のハピネスクリエイターに」（武蔵野）、「愛の実践と真理の探求」（聖カタリナ）、「自己実現がかなえられる教育を」（文京学院）、「総合知による突破力」（京都橘）、「無関心じゃいられない私になる」（大阪大谷）、「自分を伸ばすやりがい見つける」（東海学園）、「出会いが培う人間性」（山陽学園）、「いまこそ、新しい美と文化を創造するとき」（文化学園）、「責任ある奉仕の精神」（東京純心）、「志高く学ぶ学生と新たな価値を生み出す」（広島文教）、「あなたしか咲かせられない花を咲かしてみよう」（鹿児島純心）、「価値を創造し、未来を創れる人に」（神戸親和）。

宗教系の共学化校には宗教色の強いメッセージが発せられている傾向が認められるが、女子大学をルーツに持つことを匂わせるようなメッセージはほとんど皆無と言っている。共学化校の未来にとって、女子大学であったという過去は振り返る必要のないものとなっているのだろうか。

そのことがらを検証するために、パンフレット全体から「女子大学であったことに言及する文章・表現」を拾い出してみた。23 校すべてのパンフから抽出されたのは、以下の 9 つのフレーズであった。当初の予想よりも、はるかに少ない数（量）であった。

「創立者トイスラーは、キリスト教の精神に基づいて、教養ある看護職の育成と、日本の看護の質の向上を目指して聖路加国際病院附属高等看護婦学校を設立。当時のわが国の女子教育、看護教育として類をみない高度な学校教育形態であった。」（聖路加国際）

「本学は聖ドミニコ宣教修道女会を経営母体とする日本で唯一のドミニコ会の大学であります。」（聖カタリナ）

「設立母体は、1934年に創設されたカトリック女子修道会『純心聖母会』です。創設者の江角ヤスは『愛と奉仕』を純心教育の精神と考えたのです。」（東京純心）

「（学祖高橋順次郎先生は）『仏教精神を根幹とした人格育成』を理想に掲げ、武蔵野女子学院を創立。女子教育の必要性と女性の社会進出を積極的に考えた先覚者でもあります。」（武蔵野）

「杉野芳子は、単身渡ったアメリカから、帰国後日本における服飾教育を開始しました。彼女の取り組みのすべてがパイオニア精神で満たされています。（中略）2002年に服飾系の大学としてはいち早く男女共学化を実現しました。」（杉野服飾）

「建学の精神に『新しい美と文化の創造』を掲げ、1950年に文化女子短期大学として発足し、1964年には文化女子大学が開学して以来、歴史を重ね、今日に」（文化学園）

「明治37年、岡山実科女学校として創立した就実学園は建学の精神『去華就実』のもと、実り豊かな知育の情勢と実地有用な人材育成に貢献する形で高等学校・中学校から大学・大学院、子ども園、小学校教育を発展させてまいりました。」（就実）

「山陽学園は、1886年に女子教育を求めた人びとの祈りの中から生まれました。その教育理念である『愛と奉仕』は、世代から世代へと脈々と伝えられ、本年は138年目を迎えます。」（山陽学園）

「文京学院は1924年の創立以来、『自立と共生』を追求してきました。創立時には、女性の自立のための教育を、2000年代、文京学院大学としては、グローバル社会で生きる知性と専門力を育むための共学化と教育改革を。（中略）これから100年は、新たな共生・共存の未来の実現に向けて挑み続けます。」（文京学院）

最初の4つは、宗教系の共学化校の起源に言及するものである。続いて、先に服飾・ファッション系としてあげた2つの共学化校の歴史が語られている。そして、2つの中国地方の共学化校の建学の精神と歴史が述べられる。最後の文京学院の、「これから100年」を視野に収めたアピールは壮大である。「女性の自立のための教育」から、「新たな共生・共存の未来の実現に向け」ての教育へ。ここには、女子大学というものが置かれた歴史的コンテクストの変化が、如実に示されているように思われる。

（4）男と女－表紙と中身

上記のように、共学化校において、女子大学であった過去が表立ってアピールされることはほとんどないと言ってよい。では、それらの共学化校の現状は、果たしてどうなっているのか。それを検討するために注目したのが、「表紙の図柄」と「本文に出てくる在校生・卒業生の性別」であった。順にみていこう。

まず、表紙の図柄である。注目されるのが、表紙に人物を配したものが14校（6割強）あるという事実である（その他では、校舎・キャンパスを配したものが4校、大学名だけを配したシンプルなものが2校など）。なかでも、大学生（＝在学生）の写真をあしらったものが12校と圧倒的に多い。男女1名ずつを配したもの（帝塚山・鹿児島純心）、2名ずつを配したもの（神戸親和）、3名ずつを配したもの（広島文教）、ほぼ同数の多くの学生を配したものなど、実際の男女の在籍率はわからないが、男女がともに学ブイメージを打ち出している表紙が多い特徴である。

2名の女子日本人学生と2人の男子白人留学生がグループで学習している場面をあしらったもの（日本国際学園）や多数の留学生の集合写真を採用しているもの（文京学院）、あるいは講師とおぼしき白人紳士2名を取り上げたもの（梅光学院）など、国際色を前面に押し出している表紙もいくつかある。

変わり種としては、女子学生1人をあしらったもの（東海学園）やあえて1人の男子学生を打ち出しているもの（杉野服飾）もあったが、全体としては男女が等しく、楽しい学生生活を送っていることを想起させる表紙が多いと概括することができる。

次に注目したのが、「本文に出てくる在校生・卒業生の性別」の割合であった。多くの共学化校では、各学部・学科で学ぶ学生たち、そしてそれぞれの進路について活躍中の卒業生たちを名前入りで多数取り上げていた。ここではその数を男女別にカウントしてみた。共学化した歴史が長い大学ほど、取り上げられる比率は男女5割ずつに近づくと予測したが、結果は必ずしもそうになっていなかった。

新しい共学化校（2021年以降に移行）3校の女性比率は、83.7%（柴田学園）、87.5%（鹿児島純心）、82.2%（神戸親和）と8割台となっている。まだ男子の活躍をうんぬんするまでには至っていないということだろう。

他方、2001年に共学化した聖路加国際の女性比率は84.5%、2002年に共学化した杉野服飾は81.2%となっている。共学化校としての一定の歴史は有するものに、これらは看護と服飾という領域に特化した大学であり、今日でも女子学生数が多数を占めている。

最も取り上げられる女性比率が低い大学（＝男性が取り上げられる比率が高い）は、2004年スタートの武蔵野（55.6%）、2007年スタートの東海学園（55.3%）、2009年スタートの至学館（55.3%）などとなっている。このうち、武蔵野と東海学園は総合大学化の道を歩んだ共学化校であり。実際に男子の活躍の度合いが顕著であるということができよう。関西で総合大学化した京都橘の値は、全体の真ん中あたりの70.0%となっている。

（5）共学化校の現在

ここで扱った23校は、いずれも大きな歴史の変化のなかで、「共学化」に活路を見出そうとした大学である。先にも述べたように、これらの先行グループのあとを追いかけてようとする女子大学の数も、今日急増しつつある。

最後にあるジャーナリストの手による記事（「女子氷河期サバイバルー私立女子大学67校の未来像をデータから検証」、2023年3月25日）を紹介しておこう。そこでは、2004年・2020年・2024年度の入試データにもとづいて、共学化の効果があつた大学と「危険水域にある」大学の識別が図られている。指標となるのは、「志願倍率」（1.5倍以上あるかどうか）と「定員充足率」（70%以上あるかどうか）である。

その分析によると、聖路加国際、文化学園、武蔵野、至学館、京都橘、帝塚山学院、文教学院、大阪大谷、就実、広島文教の10校が「安全水域」、日本国際学園（記事が出た時点では筑波学院）、松蔭、杉野服飾、山陽学園、梅光学院の5校が「危険水域」にあると判定されている（残りは、その中間に入る）。安全水域にある聖路加国際と至学館を除く8校は、いずれも学部増設を図った大学である。共学化に合わせて「拡大策」を採ったことが功を奏した、とまとめられている。

ただし、拡大策を採ることが生き残りの秘訣だと結論づけるのは早計である。そもそも拡大策をとるためには、資金・土地・人材などのリソースが必要である。また、少子化が著しい今日、拡大策を採ったからと言って、学生が集まる保証は全くない。新学部を創設したものの定員割れが続き、数年

で撤退するという例も少なくないのが今日の状況である。さらに、「安全水域」だと判定された10校の地位が安泰かと言うと、そうではないだろう。数年のうちに「危険水域」に陥るリスクは、どの共学化校にもあると考えるべきである。

生き残りをかけて奮闘努力を続けている女子大学の「対照群」として、本項では23校の共学化校をピックアップし、若干の分析を試みてきた。改めて明らかになったのは、端的に言って「共学化したからと言って、必ずしも楽になるというものではない」という現実である。どうすれば、「安全水域」の位置をキープできるのか。私たち研究グループにとっての次なる課題は、より丹念な事例研究の積み重ねということになるだろう。

Ⅲ. 全体の分析

1. 調査目的・方法および視点

本節では、前節で地区別にみた日本の女子大学全体の、2025年度入学者用大学案内パンフレットをトータルして分析し、女子大学の現在の把握を試みる（以後、2024年調査という）。2008年に報告された安東由則・鎮朋子「女子大学の自己像—大学案内パンフレットと自己点検・評価報告書の分析から」（2008年『武庫川女子大学教育研究所研究レポート』pp.121-156）は、2004年に収集した2005年入試用のパンフレットを分析したものである（以後、2004年調査という）。2004年調査から約20年が経過した現在、女子大学が置かれている状況は当時と比較して様々な面で異なっている。少子化や女子大学の共学化の進行等である。それらの変容を踏まえつつ、女子大学の現在の一端を捉えることが本節の目的である。

とはいえ、大学案内パンフレットを分析することの意義については、当時と何ら変わらない。2004年調査の中で、「Ⅰ. 女子大学『大学案内パンフレット』」の執筆を担当した鎮は大学案内パンフレットを分析することの意義について次のように述べている。

学生募集のために毎年製作される「大学パンフレット」は、現在における大学の状況をコンパクトにまとめたものである。その紙面を通じて大学の理念や特徴を広くアピールするためのものであり、「大学の顔」としての情報の源だといえる。したがって「大学パンフレット」を分析することは現在における大学の姿勢、理念、特徴を知ることができるとの考えからこれらの調査を行うことにした。（安東・鎮 2008, p.122）

その上で、以下の4点に着目し、分析をしている（同 p.123）。

- ①パンフレットの構成について…ページ数、写真、組み立てなどの内容
- ②キャッチコピーの文言
- ③重点的なセールスポイント
- ④女子大学の意義の掲載有無とその内容

本稿も上記4つの着目点を踏襲し、分析を進めていくこととする。なお、2004年調査は当時87校ある女子大学の中から、入手した80校分のパンフレットを分析している。今回、2024年調査は、2024年時点で存在する74校の女子大学の中から、既に募集停止を発表している2校を除く72校分の2025年入学生用パンフレットを分析の対象とする。なお、その中には、2025年度に共学化することを発表している5大学（神戸松蔭女子学院大学、園田学園女子大学、東京家政学院大学、清泉女学院大学、名古屋女子大学）も含まれている。

2. 分析結果

(1) 概要および特徴

第1にパンフレットの体裁についてである。ほとんどの大学案内パンフレットがA4判であるが、4校はそうではなかった。まず大阪女学院大学は大学案内を2冊に分けており、1冊はB5判、もう1冊（別冊）はA4判である。つぎに、甲南女子大学は、横幅はA4判であるが、縦がB5判である。鎌倉女子大学も若干のサイズの差はあるが、甲南女子とほぼ同じサイズである。最後に、異彩を放っているのが女子美術大学である。縦54cm×横124cmの大きな紙を縦2つ、横8つの16等分に折りたたんだ、新聞紙のような紙1枚が大学案内である。大きな紙の一面には様々な情報が記載されているが、その裏面のほとんどは数々の美術作品（絵）が掲載されており、少しのスペースに大学の歴史の年表がつけられている。極めて印象的な大学案内である。

第2に表紙に何が描かれているのか、である。大きく分けると3分類できる。まず、①学生たちと思われる人物の顔や姿がメインとなっているものである。これは37校であり、約半数を占める。つぎに、②大学の建物や建物の一部のみの表紙であり、15校である。最後に、③それ以外のものとして、文字だけのものやイラスト、デザイン画などは20校である（なお、大学を背景に学生がメインとなっているものについては、①にカウントした）。全体の約半分が①で、残りの半分をさらに半分ずつしたのが②と③という配分というのがおおよその傾向である。これらの表紙について、明らかに傾向が異なる地域がある。それは東京の女子大学であった。東京の20校の女子大学だけをカウントすると、①が5校、②が7校、③が8校である。そのほかの地域では約半数を占めている①が少ないのが東京の女子大学のパンフレットの傾向と言えるだろう。

第3に頁数についてである。表8は、2004年調査と2024年調査のデータを比較した表である。2004年調査は20～59頁の学校数の割合が比較的高いのに対し、2024年調査は120～139頁のそれが比較的高い。平均頁数を比較すると、2004年調査は平均80.2頁であるのに対し、2024年調査は88.1頁であり、約8頁増加していることがわかる。2004年調査では東京家政大学が387頁と突出して多いが、2024年調査においても、同大学は196頁と、約100頁減ってはいるものの、それでも最も頁数が多い大学である。なお、ここでは2024年調査において冊子の形態をとっていない女子美術大学は除外し、71校を分析対象としている。

表8 パンフレットの総ページ数の比較

ページ数	2004年調査		2024年調査	
	学校数	%	学校数	%
180頁以上	2	2.50	1	1.41
160～179頁	3	3.75	3	4.23
140～159頁	0	0.00	0	0.00
120～139頁	2	2.50	9	12.68
100～119頁	11	13.75	9	12.68
80～99頁	14	17.50	18	25.35
60～79頁	22	27.50	20	28.17
40～59頁	14	17.50	6	8.45
20～39頁	11	13.75	4	5.63
19頁以下	1	1.25	2	1.41
合計	80	100.00	72	100.00

第4に、パンフレットの内容である。2004年調査では、「全体の組み立て方では、多くの大学が『大学の理念』→『学長メッセージ』→『沿革』→『学科紹介』→『資格』→『就職』の順番となっている」（p.123、下線筆者）とあるが、2024年調査では、特に「学長メッセージの位置」に変化があるように思われる。学長メッセージが前のほうにある大学は、71校中46校（64.8%）であり、2004年調査で記述されたように「多くの大学」とは言えない学校数ではないだろうか。なお、後ろのほうにある大学は15校（21.1%）、それ以外（真ん中の方にあるものや、そもそも学長メッセージ自体の掲載が無いもの）は10校（14.1%）である。特に、関西地区の女子大学17校中、学長メッ

セージが後ろのほうに掲載されている学校は6校（35.3%）であり、その傾向がやや強いようである。なお、学長メッセージ自体がない大学は、東京家政学院大学、岡崎女子大学、郡山女子大学、平安女学院大学、京都華頂大学、安田女子大学である。これらの大学の公式ホームページを確認すると、いずれの大学においても学長メッセージが掲載されている。それぞれの大学案内は、大学の特色や学生、卒業生のインタビュー記事などを前面に出しており、学長メッセージのスペースを節約しているのか、そもそも学長メッセージは受験生には不要と考えているのかは不明である。なお、冊子ではないためカウントはしていないが、女子美術大学については、大学案内にも、また公式ホームページにさえ学長メッセージは掲載されていない。

最後に、大学案内の全体的な印象についてである。2004年調査では、文章中心のものと「女性雑誌風」のものに大別している。そして文章中心の場合、女子大学で学ぶことの意義が明確に記載されていることが多いことを見出している。しかし、今回の大学案内を概観する限り、2004年調査で見られたように、文章中心の大学案内に女子大学で学ぶことの意義が明確に書かれている傾向、逆に言うと、「女性雑誌風」の大学案内にはその意義が明確には打ち出されていない傾向がある、とは言えないように思われる。つまり、「女性雑誌風」な大学案内の中に、女子大学で学ぶことの意義を明確に記載したものが少なくはなかったのである。たとえば、武庫川女子大学の大学案内は、表紙にモデルと思われる印象的な人物を起用し、「女性雑誌風」とも言える印象であるが、「一生を描ききる女性力を」というキャッチコピーを掲げ、「女性の活躍がより望まれる時代を迎えた今、個性輝く女性を社会に送り出すこと。それが、女子総合大学の果たすべき使命だと確信しています」（p.2「MUKOJYO VISION」より）というように、女子大学で学ぶことの意義やその存在意義を明確に打ち出している。ここに2004年調査と2024年調査の違いを指摘することができるだろう。

ただし、今回の2024年調査では、大学案内に「女子大学で学ぶことの意義」や「女子（女性）教育」についての記述がある大学は72校中50校であることが確認できたが、それらの大学案内を一括りにすることは難しい。記述内容に強弱や色合いの違いがあるためである。一方には、現代社会の女性が置かれている状況を批判的に捉え、女性の自立や活躍を強く訴えるものがある。たとえば、群馬県立女子大学の「女子だけの環境だからこそ、古い性別役割分担意識にとらわれることなく、誰もがリーダーとして活躍できる機会に恵まれ、伸び伸びと個性を発揮できる場となります」（p.2「学長メッセージ」より）や昭和女子大学の「社会が急激に変わった今は、女性の社会進出が増え、自らがしっかりと働く力を身につけるための女子教育が求められるようになってきた」（p.9「鼎談 変わり続ける昭和女子大学」総長の発言内容より）などである。しかし他方には、「女子（女性）」という言葉を使っていたとしても、その言葉を使わなくとも文章が成り立ったり、「人物」「人材」などに置き換えることが可能だったりするものもある。

さらに、注意したい点としては、「女子大学で学ぶことの意義」や「女子（女性）教育」について記述されていたとしても、そこには対極的な2つのスタンスが見てとれた。一方は、これまで述べてきた具体例のように、女性の自立や活躍、ひいてはジェンダー平等を念頭に記述されているものである。他方で、「しなやかさ」や「凛とした」など、「女性らしさ」を強調する語彙を用いたものもあった。女子大学の意義を謳っていても、その目指すものが革新的か、保守的なか、その方向性が分かれていると言うこともできよう。「女子大学の意義」については4）でさらに詳しく分析し、記述する。

（2）キャッチコピー

ここでは、先に紹介した武庫川女子大学の「一生を描ききる女性力を」のように、大学案内の表紙や1頁目に書かれたキャッチコピーについてみていく。キャッチコピーはその大学が大切にしている

価値観や学生像を端的に表現した文言であると言えよう。このキャッチコピーが大学案内に見当たらない大学は、2004年調査では80校中11校（13.8%）とされているが、2024年調査では女子美術大学以外、すべての大学について、それらしき文言を見出すことができた。ただし、大学のキャッチコピーとして定着している言葉なのか、もしくは大学案内だけに用いられている言葉のかなどについては不明である。

キャッチコピーの例を挙げると、たとえば、「自分が花開く学びを」（北海道武蔵女子大学）、「愛のある知性を」（宮城学院女子大学）、「あなたらしさをともに育む」（十文字学園女子大学）、「なりたいわたしは、ここにいる」（川村学園女子大学）、「世界を変える、行動する JISSEN」（実践女子大学）、「For Others」（フェリス女学院大学）、「好奇心のその先へ。強く、優しく。」（金城学院大学）、「わたしらしく、誇らしく」（京都ノートルダム女子大学）、「チャレンジ&エレガンス」（梅花女子大学）、「キュウジョウショウ」（九州女子大学）など、内容もさることながら、表記方法についても、平仮名のみで書かれたもの、英語のもの、片仮名のみで書かれたものなどさまざまである。

キャッチコピーに使用された単語の使用頻度を示したものが表9である。分析にはKHコーダーを使用した。総抽出語数は700語、このうち助詞などを除いき、最終的に分析に使用する語数は214語であった。「grow」「育てる」「育成」など、似た意味の単語は同一の単語としてカウントし、これらは一部手作業でカウントした。

使用頻度が最も高かったのは「女性・女子」であり、10回である（2004年調査は5番目（5回））。たとえば「自立して輝く女性になるために」（和洋女子大学）、「グローバル女性リーダーが未来をひらく」（お茶の水女子大学）、「学び働き続ける自立自存の女性を育成する」（大妻女子大学）などである。女子大学であることをアピールし、社会に出て活躍する女性を育成する大学であることを謳ったものがほとんどである。

次に、「学ぶ・学び」「Grow・育む・育成・成長」であり、それぞれ8回である（2004年調査では、前者は7番目（3回）、後者は4番目（6回）であるが、「育成」は別にカウントされており（1回）、合計すると順番は4番目と変わらないが、回数は7回となる）。たとえば、「世界の中のわたしとして学ぶ」（大阪女学院大学）、「街と、人と、共に学ぶ」（神戸女子大学）、「心に触れて、『要』を育む」（西南女学院大学）、「あなたらしさをともに育む」（十文字学園女子大学）、「Grow Yourself. 進め、新しい私」（平安女学院大学）などである。大学は到達点ではなく、大学の中で学び、成長することを訴えたものだと言えるだろう。

3番目に多かった単語は「世界」であり、6回である（2004年調査では、「世界地図」「世界」という単語がそれぞれ8番目（2回））。たとえば、「世界を動かす人になる」（福岡女子大学）、「愛を広

表9 キャッチコピー中に見られる単語と使用回数

言 葉	回数
女性・女子	10
学ぶ・学び/Grow・育む・育成・成長	8
世界	6
新しい/人/未来	5
愛/強い/社会/生きる/自分・yourself/変える・変革	4
好き/奉仕/力/リーダー・リーダーシップ/人々・others/共に・together	3
しなやか/一生/教育/今/自由/自立/人々/精神/選ぶ/大学/知性/超える/動かす/美しい	2
一人一人/しあわせ・幸福/花開く・咲く	

める藤の学び—藤から世界へ—」(藤女子大学)、「世界を変える、行動する JISSEN」(実践女子大学)などである。

2004 年調査では、「自分・じぶん・自分自身・私・私たち・私自身」が群を抜いて多く、20 回であったが、今回は 4 回に留まり、一方で、「女性・女子」や「世界」という言葉が上位に出現している。印象レベルではあるが、2004 年では個人の幸せや夢を実現する場所としての女子大学の意義がアピールされていたが、一方、2024 年では、世界や社会で活躍する女性を育む場としての女子大学の意義がアピールされているように思われる。2004 年当時は、先行きが不透明な社会の中で、ニートの存在が注目され、「自分探し」という言葉が若者を形容する言葉としてよく使用されていたが、そのような社会状況を反映していたのかもしれない。一方、現在の女子大学の大学案内については、2015 年にいわゆる「女性活躍推進法」が 10 年間の時限立法という形で成立し、さまざまな施策が打たれてきたが、そのような社会の流れの影響とみることもできるだろう。いずれにせよ、大学案内に見られるキャッチコピーは、社会状況を反映している可能性があり、女性の活躍が期待される現在は、女子大学のキャッチコピーもそれに応える形になっていると考えることができるだろう。

(3) セールスポイント

2004 年調査では「資格」と「就職」に着目し、ほとんどの女子大学で見開き 2 頁以上を費やしていることや、教員、保育士、管理栄養士、心理士などの専門的な資格取得や、上場企業や公務員、教員に就職できた人数などをグラフや表を用いてアピールしていることが指摘された。

1) 資格関連

資格関連の頁を見てみると、2004 年調査では学科別の頁がない学校が 26 校 (32.5%)、学科別の頁がある学校が 54 校 (67.5%) であり、学科別の資格関連頁がある学校が多かった。頁構成についてみると、学科別の頁がない学校では 1 頁のみの学校が多く (13.8%)、学科別の頁がある学校では全体で 2 頁に加え学科別の資格関連頁を掲載している学校が多かった (26.3%)。

資格関連に割く頁と学部数について着目してみよう。学科別の頁がなく、資格関連頁が 1 頁の大学は、多くは 1 学部のみであった (1 学科: 愛国学園大学、清泉女学院大学、東京女子体育大学、2 学科: 学習院女子大学、日本女子体育大学、平均学部・学科数: 1.5 学部 3.2 学科)。学部が同じであることや、学部で取得できる資格の関係から、頁数が少なかったと考えられる。一方で、全体としての 2 頁に加え、各学科の資格関連頁を割いた大学は、学部・学科数が多かった (武庫川女子大学 4 学部 12 学科、日本女子大学 4 学部 15 学科、相山女学園大学 5 学部 9 学科、平均学部・学科数: 2.4 学部 7.1 学科)。学部・学科ごとに様々な資格が取得でき、そのことがアピール材料となることから、多くの頁数を割いたと考えられる。

資格関連頁がどのように推移したのかを見ておこう。2004 年調査と 2024 年調査で、学科別の資格関連頁がある割合に大きな変化はなかった (2004 年調査 67.5%、2024 年調査 70.8%)。しかしながら、2024 年調査では、学科別の資格関連頁のある大学では、全体としても 6 頁以上の紙幅をとっている大学が見られる (活水女子大学、福岡女学院大学、実践女子大学、聖心女子大学、跡見学園女子大学、藤女子大学、昭和女子大学、鎌倉女子大学)。学科別の資格頁の多くは、保育職や教職、栄養教諭や司書教諭などの免許資格科目や、色彩検定などの民間資格、二級建築士などの国家試験の受験資格を数行程度で掲載するものであった。これらを 4 分の 1 頁として計算すると、平均して 1.5 頁分の学科別資格関連頁数となる。このように計算したとき、全体の頁数と学科別頁数の合計が多い大学として浮かび上がった、鎌倉女子大学 (13 頁) の特徴を見てみよう。鎌倉女子大学のパンフレットでは、「食の安全を守りたい」など、学生の興味関心に応じた免許資格の頁に続き、各資格の説明と

その資格取得を目指す学生の紹介がある。さらに学科別の頁でも、取得可能な免許・資格が紹介されるという作りとなっている。フードスペシャリストやレクリエーション・インストラクターなど、様々な免許・資格が登場したことに加え、大学での学びを資格取得という可視化可能な制度で説明するために、頁数が増えたと考えられる。一方で、免許資格に関連する頁が見られない学校も増えており、誌面の二極化が進んでいる様子も伺える。

表 10 資格関連ページの推移

資格	2004年調査		2024年調査	
	学校数	%	学校数	%
0ページ	3	3.8%	8	11.1%
1ページ	11	13.8%	5	6.9%
2ページ	8	10.0%	6	8.3%
3ページ	2	2.5%	1	1.4%
4ページ	2	2.5%	0	0.0%
7ページ	0	0.0%	1	1.4%
各学科	14	17.5%	8	11.1%
1p+各学科	10	12.5%	17	23.6%
2p+各学科	21	26.3%	11	15.3%
3p+各学科	2	2.5%	7	9.7%
4p+各学科	7	8.8%	2	2.8%
6p+各学科	0	0.0%	2	2.8%
7p+各学科	0	0.0%	1	1.4%
8p+各学科	0	0.0%	2	2.8%
11p+各学科	0	0.0%	1	1.4%
合計	80	100.0%	72	100.0%
学科別なし	26	32.5%	21	29.2%
学科別あり	54	67.5%	51	70.8%

2) 進路・就職関連

進路・就職関連の頁をみると、2004年調査では学科別の頁がない学校が56校（70.0%）、学科別の頁がある学校が24校（30.0%）であり、学科別の頁がない学校の方が多かった。学科別の頁がない学校では2頁（22.5%）または、4頁（21.3%）の学校が多く、学科別の頁がある学校では全体として4頁に加え、各学科の就職先を掲載している学校が多かった（11.3%）。ただし、資格関連ほどには学部・学科数との関連は見出せなかった（進路・就職関連 全体で4頁 学科別なしの平均学部数1.9 平均学科数6.3、学科別ありの平均学部数2.4、平均学科数6.8）。資格関連は教学内容と密接に関わることから学部・学科ごとの違いを明確に打ち出せる一方で、就職先については看護職や保育職、教職などの免許資格が必要なキャリア以外では、学部・学科ごとの違いを打ち出しづらいなどの状況があると考えられる。

進路・就職関連の頁がどのように推移したのかを見ておこう。顕著な変化として、全体の頁以外

表 11 進路・就職関連ページの推移

進路・就職	2004年調査		2024年調査	
	学校数	%	学校数	%
0ページ	2	2.5%	1	1.4%
1ページ	4	5.0%	2	2.8%
2ページ	18	22.5%	4	5.6%
3ページ	9	11.3%	4	5.6%
4ページ	15	18.8%	1	1.4%
5ページ	3	3.8%	3	4.2%
6ページ	3	3.8%	0	0.0%
8ページ	2	2.5%	1	1.4%
10ページ	0	0.0%	2	2.8%
12ページ	0	0.0%	3	4.2%
13ページ以上	0	0.0%	2	2.8%
各学科	3	3.8%	4	5.6%
1p+各学科	2	2.5%	1	1.4%
2p+各学科	4	5.0%	6	8.3%
3p+各学科	0	0.0%	3	4.2%
4p+各学科	9	11.3%	3	4.2%
5p+各学科	1	1.3%	4	5.6%
6p+各学科	2	2.5%	3	4.2%
7p+各学科	0	0.0%	3	4.2%
8p+各学科	3	3.8%	3	4.2%
10p+各学科	0	0.0%	6	8.3%
11p+各学科	0	0.0%	2	2.8%
12p+各学科	0	0.0%	3	4.2%
13p以上+各学科	0	0.0%	8	11.1%
合計	80	100.0%	72	100.0%
学科別なし	56	70.0%	23	31.9%
学科別あり	24	30.0%	49	68.1%

に、各学科の頁の中で進路・就職を紹介する割合が増えていることが指摘できる（学科別あり 2004 年 30.0%、2024 年 68.1%）。学科別の主な就職先に加え、職種別の進路割合などのデータを掲載している大学もしばしば見られる。多くの大学で見られるのは、その学科の卒業生の頁があることだ。その結果、進路・就職関連頁は大きく増えている。全体で 10 頁以上扱っている大学は、2004 年調査では見られなかったが 2024 年調査では 19 校（26.4%）に及ぶ。最も多い大学は、全体で 8 頁を使い、かつパンフレットの後ろからキャリア別の卒業生のストーリーを 47 頁分紹介した東京家政大学である。東京女子大学も、全体の 7 頁とは別に卒業生との対談を本誌内の別冊仕立てで 15 頁分とっている。また、最初の方の頁で卒業生のストーリーを紹介し、そのあとでキャリア支援体制を説明する流れの構成をとる大学もしばしば見られる。ここから読み取れるのは、単に数字や免許資格の名前でなく、物語として読者に訴求しようというパンフレットの作りになっている点である。「この

ような人になりたい」という憧れを生み出せるかどうかが重視されていることが、紙面の作りから伺える。

（４）女子大学の意義

2004 年度調査では、女子大学の意義を掲載していたのは 80 校中 38 校（47.5%）であり、その中でも「女子大学で学ぶこと」の意義を明確に強調していたのは 3 校だけであった。それも、「女子大学でないと学べない教育がある」（聖徳大学）、「女性の自立性、男女の協力」（京都女子大学）、「女性の枠から自由になる」（京都ノートルダム女子大学）というものであった。なお、東京女子大学は学長メッセージで、男性の目を意識することなく自己表現し、リーダーシップを養うことを助けるについて述べられていた。そのほか、自立や自律、自己実現（津田塾大学、広島女学院大学）や、自ら思考し行動できる（清泉女子大学、十文字学園女子大学）などが女子教育の意義として挙げられていた。

2024 年調査では、72 校中 45 校（62.5%）が女子大学の意義・女子教育の意義について述べられていた。なお、建学の精神や学則では記述が見られるものの、学長メッセージなどで明確に述べられていない場合はカウントしていない。ここから、2004 年調査と比べて、より女子大学としての意義を強調する大学の割合が増えたことが伺える。母数となる女子大学数が減っているにも関わらず、女子大学の意義をアピールする大学が増えた背景には、女子大学の共学化が影響していると考えられる。共学化に向かった、もしくは検討している大学は、女子大学であることを目立たせないことで、同じ偏差値帯にある共学の大学との競争力を保持しようと考えたと推察できる。一方で、共学化せずに女子大学として存続するためには、女子大学の意義を再考しアピールが必要であったことから、女子大学の意義について述べる大学の割合が増えたと考えられる。

１）女子大学の意義をアピールするようになった大学

2004 年調査では女子大学の意義に関する記述が見られなかったが、2024 年調査で記述が見られる大学について見てみよう。「女子大学にはジェンダーバイアスがないので、自分らしく可能性を伸ばせる」（跡見学園女子大学）、「一人ひとりが尊重され、ジェンダーによる価値観に縛られない環境下で、自由に、思い切りチャレンジできる、それが女子大学の魅力です」（大阪女学院大学）、「日本の中心で、社会の担い手となる女性を育む」（共立女子大学）、「女性の社会進出が増え、自らがしっかりと働く力をつけるための女子教育が求められるようになった」（昭和女子大学）、「豊かな知性と能力を身につけた、社会をリードする女性」（金城学院大学）、「日本の発展には女性が持つ力を社会に活かすことが不可欠と信じ、一貫して女子教育の向上に取り組んできた」（椋山女学園大学）などの大学が見られる。これらの大学を見ると、東京や大阪、名古屋など都市部の大学において、女子大学の意義を打ち出した大学であることがわかる。これら大学の中には、「リーダーシップ教育」（共立女子大学）、「グローバルビジネスでの活躍」（昭和女子大学）など、女性が広い世界で積極的な役割を担うことを意識したメッセージが読み取れる。

２）女子大学の意義をアピールしない方針が継続している大学

一方、2004 年調査、2024 年調査ともに女子大学の意義に関する記述が見出しにくい、または建学の精神などで書かれているのみで積極的なアピールが見られない大学もあった（藤女子大学、仙台北百合女子大学、和洋女子大学、女子栄養大学、岐阜女子大学、ノートルダム清心女子大学、尚絅大学、大阪樟蔭女子大学、千里金蘭大学、平安女学院大学、京都光華女子大学、神戸女子大学、福岡女子大学、女子美術大学）。なお、2004 年調査、2024 年調査ともに女子大学の意義に関する記述が見出しにくかった大学の中には、募集停止となった神戸海星女子学院や、共学化に至った神戸松蔭女子

学院（現・神戸松蔭大学）が含まれている。これらの大学の立地を見ると、北海道や宮城、千葉、埼玉、岐阜、岡山、熊本などにある大学が見られる。これら大学については、その地域においてあえて女子大学であることを打ち出さなくても、地域の認知やニーズがあることが推察できる。一方、大阪、京都、兵庫、福岡の大学であっても女子大学の意義を打ち出していない大学については、何らかの経営方針や経営体制が影響していると思われる。

3) 女子大学の意義をアピールしなくなった大学

2004年調査では女子大学の意義に関する記述が見られたが、2024年調査で見られなくなった大学もある。「女性の持つしなやかな感性と的確な知性はあらゆる方面で求められる」（郡山女子大学）や、「優しく剛く現代をしなやかに生きる女性を育てたい」（安田女子大学）と、両方とも「女性」を「しなやか」と表現していた点で共通している。「女子に最高水準の教育を。地域や国際社会の発展に貢献する女性の育成」をアピールしていた活水女子大学では、「活水DNAを受け継ぎ、新しい時代に生きる新しい自分を作り上げるような学生生活を」と、女子大学・女子教育に関するメッセージが「活水DNA」という言葉に収斂されている。これらの変化から、あえて「女子」と区別してアピールすること自体が、男女差を意識させることにつながると考えた大学もあると推察される。「女子大学」であることを強く打ち出しすぎると、同じ偏差値帯の共学校との学生獲得において不利に働くとの経営的判断もあるかもしれない。トランスジェンダーに関する社会問題が広まっている今日において、女子という明確な性区分を前提とするアピールはしづらいという要因もあるかもしれない。2004年には「女性の科学的教養の向上」を打ち出していた鎌倉女子大学は、2024年では保護者頁において「多様化する現代女性の生き方」「女性が仕事を持ち、働き続ける社会へと変化」を掲載しており、女子大学の意義をアピールする姿勢としてはやや後退しているようにも見える。

4) 女子大学の意義をアピールし続けている大学

では、2004年、2024年ともに女子大学の意義を打ち出していた大学に、どのようなメッセージの変化が見られるのであろうか。大妻女子大学は、2004年は「自立した女性の育成」をアピールしていたが、2024年は「女子教育に積極的な役割を果たす教育・研究活動」と、より女子教育全体に言及するようになっている。「生涯にわたって学び働き続ける女性」という将来モデルを示し、データサイエンス学部の創設などを通じて、専門的知識技術の習得を女性の自立の条件と位置付けている。同様の傾向は国立のお茶の水女子大学でも見られる。2004年は「先見性を持つ自立した女性の育成」をアピールしていたが、2024年では「グローバル女性リーダーが未来をひらく」とやはり女子教育全体の中での積極的な役割を担うメッセージとなっている。また、女性として初の帝大生、理学博士を輩出した歴史を根拠として理系分野での教育もアピールしている。一方、川村学園女子大学（千葉県）は、「教養教育と資格教育こそが女子大学の使命」というアピールを2024年も続けており、「女性活躍が期待される社会においてあなたを守る大きな力になる教養と資格を育む。」とアピールしている。ここから、この20年間に於いて、地域に一定のニーズがあり、それに応えていた様子が伺える。関西に目を移せば、京都女子大学は「女子大学であるからこそ女性の自立、男女協力の必要性が客観的体型的に学べる」とアピールしていたが、2024年には「無意識のうちに一步譲っていた自分や、社会の不公正に気づくこと」「男性の眼を気にすることなく、自らの考えを積極的に発言し、主体的に働いていく心地よさを知ること。そうした学びを提供できることが女子大学の存在意義」と、女子大学・女子教育全体への言及が見られる。一方、同志社女子大学は「社会の発展には女子教育を盛んにすることが不可欠」と、女子教育の意義を積極的にアピールしていたが、2024年は「古きを大切にし、新しきを生きる。リベラル・アーツとともに品格と良心を持って、豊かな世界づくりに寄与する女性」と、「リベラル・アーツ」や共学校の同志社大学と同じ建学の精神である「良心」な

ど、建学の精神に即した言葉が見られるメッセージとなっている。京都ノートルダム女子大学では、「女子大学という場で女性の枠から自由になり、自分自身と向き合って過ごせる」というアピールから、「聖母マリアにならい、知識と教養を持って自分らしい輝きを見つけ、これからの社会をしなやかに生きる女性を育成する」という表現となっており、「女性の枠から自由になる」という表現から「しなやかに生きる女性」という表現になっている。神戸女学院大学は、「よりよい活躍や奉仕のできる教養と人格の兼ね備えた女性を育成」という表現が「女性の更なる活躍を応援」という表現になっている。

5) 語句や表現の変化

なお、「活躍」という言葉は2024年調査ではしばしば見られる表現である（清泉女子大学、東京家政大学、日本女子体育大学、神戸女学院大学、梅花女子大学、北海道武蔵女子大学、群馬県立女子大学、川村学園女子大学）。2004年調査では、「活躍」という言葉を用いているのは神戸女学院のみであった。2022年に改正女性活躍推進法が施行されたことも、「活躍」という言葉が増えた要因であると推察できる。次に、「リーダー」（お茶の水女子大学、共立女子大学、学習院女子大学、甲南女子大学、群馬県立女子大学、東洋英和女学院大学、金城学院大学）という言葉もよく見られるようになった。2004年調査では見られなかった言葉である。

そのほかにも、「働く」（昭和女子大学、鎌倉女子大学）、「ジェンダー」（跡見学園女子大学、大阪女学院大学）、「貢献」（聖心女子大学、白百合女子大学、尚絨大学、愛国学園大学）、「のびのび」（日本女子大学、北海道武蔵女子大学）、「しなやか」（相模女子大学、九州女子大学）、「発想」（実践女子大学、フェリス女学院大学）、「自立」（筑紫女学園大学、東京女子大学）、「個（性）」（武庫川女子大学、広島女学院大学、福岡女学院大学）などの言葉も、女子大学・女子教育の意義を語る表現として複数の大学パンフレットで見られた。女子美術大学と東京女子医科大学はいずれも「社会的地位」という表現があり、専門技能を持って女性の社会的地位の向上がアピールされていた。

3. 考察

本節では、2004年調査と同様に、2025年度入学者用の大学案内パンフレットを、①パンフレットの構成、②キャッチコピー、③セールスポイント、④女子大学の意義の有無を対象として分析した。

パンフレットの体裁についてはほとんどがA4版であったが、新聞紙のような作りや、ハンドブック風の冊子形態とする大学もあった。見やすさや手に取りやすさ、情報の検索のしやすさから言えば、A4版の方が読みやすい。表紙の内容については、「学生の顔や姿をメインとしたもの」「大学の建物の写真」「その他」に大別できる。頁数は2004年調査に比べ、平均8頁増加している。紙面構成を見ると、学長メッセージがない大学も見られた。女子大学で学ことの意義や女子教育については、ジェンダー平等を訴える革新的なものと、女性らしさを強調する保守的なものに二分化された。キャッチコピーに着目すると、「学ぶ・学び」「育む・成長」「世界」などの単語が多く使われており、学びの場としての女子大学や世界での活躍を意識したものとなっている。一方で、2004年調査で多かった「自分・じぶん・私」はやや減少し、個人の夢や自己実現の場としての大学よりも、社会や世界で活躍する女性を育成する場としての意義が強調されていた。

重点アピールとして取り上げられていた、資格や進路・就職関連の頁に着目すると、資格関連頁が全体及び学科別でも増えている大学が見られる一方で、資格関連頁に紙幅を取らなくなった大学もあるという二極化の傾向が見られた。多くの大学では、看護や保育、教育、栄養などに関連する免許資格を学科別で掲載しているが、学部学科の多い大学では民間資格なども掲載する様子が見られた。ここから、大学での学びを、外部の免許資格という可視化された制度で説明しようとする様子が伺え

た。進路・就職関連頁を見ると、学科別の頁で紹介する割合が大きく増えた。頁数が増えた要因として、卒業生のストーリーを紹介する形態の紙面づくりがしばしば見られるようになったことがあげられる。就職率などの数値や、どこの企業に就職したのかという名称だけでなく、どのような人がどのような学びを経て社会で過ごしているのかというキャリアを物語化し、そこに憧れを抱かせようとする作りが増えたことが、全体の頁数が増えた要因としてあげられる。

女子大学の意義を述べる大学は割合的には増えていた。これは、共学化の波が押し寄せる中、女子校として存続するために改めて女子大学の意義をアピールする必要があったためだと考えられる。女子大学の意義をアピールするようになった大学では、「ジェンダーバイアスのない環境」「女性の社会的活躍」などをアピールしていた。一方、女子大学の意義をアピールしなくなった大学を見ると、2004年調査で見られた「女性の持つしなやかさ」「女性ならではの見方を生かして」などの表現が、逆に性差を過度に意識させるものとして捉えられるようになったという社会の変化を反映しているようにも見える。女子大学の意義をアピールし続けている大学を見ると、女子教育全体への言及が増え、具体的な学びやリーダー育成をアピールするメッセージが見られた。

IV. まとめ

まず、本稿で見出された主な知見を整理しておきたい。

- ① 【東日本（東京都を除く）の女子大学について】 女子大学であることの意義を打ち出す大学は相対的に少ない。収容率が高い大学には、偏差値が相対的に高い、地理的に周辺学生を一定数確保しやすい環境にある、母体が比較的大きいなどの特徴がみられた。
- ② 【東京の女子大学について】 多くの大学が古い歴史をもち、早くに創設された大学ほど偏差値が高く、女性学長も多い傾向があった。上位校は「リーダーシップ」「自立」「変革」などの明確なキャッチフレーズを掲げ、学部の多様化・新設によってブランドイメージを高めようとしているのに対して、中・下位校では地域密着型の学びの場の提供や資格取得支援の強化などの戦略をとっていた。
- ③ 【西日本の女子大学について】 京阪神地域において、女性教育を前面に押し出す大学が数校見られた。関西はスピードが早く競い合っているようだが、四国・九州ではややのんびりしているように見受けられる。
- ④ 【共学化した大学について】 地方の、小規模は女子大学が、生き残りをかけていち早く変身を遂げようとしたのが共学化校である。現時点で、女子大学であったことに言及する文章・表現はほとんど見られない。また共学化したからと言って、必ずしも楽になるというものではない。
- ⑤ 【全体の分析（「キャッチフレーズ」）から】 2004年調査では、個人の幸せや夢を実現する場所としての女子大学の意義がアピールされていたが、現在では、世界や社会で活躍する女性を育む場としての女子大学の意義が強調されている。
- ⑥ 【全体の分析（「セールスポイント」）から】 「資格」に関しては、紙面の二極化が見られる。「進路・就職」に関しては、学科ごとの頁が増えており、読み手に訴求したい「卒業生のストーリー」を打ち出す紙面づくりが進んでいる。
- ⑦ 【全体の分析「女子大学の意義」から】 2004年調査と比べて、女子大学としての意義を強調する大学の割合が増えた（47.5%→62.5%）。また、2004年には見られなかった「活躍」「リーダー」といった語の使用例が増えている。

「自己呈示」(self presentation)という言葉を使い始めたのは、ゴフマンという社会学者である。ゴフマンは、人間の社会生活を演劇のメタファーを使って捉えようとした。諸個人が演者(パフォーマー)であり、周囲の人々が観客(オーディエンス)である。本稿の文脈に置き換えると、個々の女子大学が演者であり、受験生やその保護者たちが観客となる。各大学のパンフレットは、大学の魅力やポテンシャルを最大限アピールするための代表的な媒体であると言ってよい。ゴフマンは、社会生活を「表舞台」と「舞台裏」に分けて把握しようと試みた。パンフに描かれていることは、まさに表舞台でのパフォーマンスである。その背後には舞台裏や楽屋での動きや振る舞いがあり、さらには演者たちの日常生活がある。

本文Ⅲ節でもふれられているように、本学(武庫川女子大学)のパンフレットの表紙には、モデルとおぼしき印象的な若い人物の写真が配され、「一生を描き切る女性力を」という切れ味のあるキャッチコピーが提示されている。そのうえで、「女性の活躍がより望まれる時代を迎えた今、個性輝く女性を社会に送り出すこと。それが、女子総合大学の果たすべき使命だと確信しています」という力強いメッセージが続き、その具体的な教育の中身が各頁で展開されていく。まさに、ゴフマンの言う通りである。楽屋は見えない。すなわち、実際の女子大生活は、実際にそれを体験してみない者にはわからない。あくまでもパンフレットは表舞台である。舞台の上での勝負が図られている。

2008年に執筆された先行研究との比較(2004年調査と2024年調査の差異)の観点から浮かび上がってきたのは「女子大学であることをアピールする大学の割合が増えた」(上記⑦)という事実である。これはひとえに、女子大学という舞台を取り巻く社会環境が変わっていることの証だと指摘できるだろう。女子大学に対する逆風が強まっているという環境の変化が、舞台でのパフォーマンスに影響を与えている。対照的に、Ⅱ節の4でみたように、この20年ほどの間で共学化した20校あまりのなかで、元女子大学であるというルーツをアピールしている大学はほとんどない(上記④)。過去を振り返っている余裕はない。今を生き抜くことに精一杯であるという共学化校の現状が、そこに見てとれる。

もう一点、20年間の変化ということで強調しておきたいのは、以前は「個人の幸せや夢を実現する場」としての側面が強調されていたのに対して、現在では「世界や社会で活躍する女性を育む場」としてのそれが強調されている(上記⑤)という事実である。2015年に成立、2022年に改正された女性活躍推進法の存在が大きいと思われる。個人化された自己実現から社会化された女性活躍へ。女子大学を取り巻く社会環境の変化にどう適応してゆけるか。女子大学の真価・自力が問われている。

各大学のパンフレットは、一つひとつがユニークな「演目」を構成していた。見出されたのは、基本的には多様性・バリエーションである。収集されたトータルで100部近くの大学パンフには、それぞれのストーリーがあった。そしてその内部には、一人ひとりの卒業生や在校生のストーリーが色彩豊かに展開されていた。そうした状況のなかで、「二極化」とも呼べる現象がいくつか見出された。改革に忙しい都市部の大学と比較的のんびりとしている地方の大学。安定した収容率を誇る大学と定員割れに汲々としている大学。革新的な女性像で迫る大学と伝統的な女性らしさを保持する大学。職業資格を強調する大学と免許や資格にこだわりを見せない大学(上記⑥)。

なぜこのようなバリエーションが生じているのかという問題については、本論文と並行してまとめられた金南による量的分析をまとめた論文(本号に所収)で深堀りを試みている。本稿と合わせてお読みいただければ幸いである。

引用文献

安東由則・鎮朋子 2008,「女子大学の自己像－大学案内パンフレットと自己点検・評価報告書の分析から」、『武庫川女子大学教育研究所レポート』第 38 号、121-158 頁。

ゴフマン, I. 1956, *The Presentation of Self in Everyday Life*, Doubleday. (= 2023,『日常生活における自己呈示』(中河伸俊他訳) ちくま学芸文庫)

伊佐夏実 2021,「難関大に進学する女子はなぜ少ないのか－難関高校出身者に焦点をあてたジェンダーによる進路文化のメカニズム」、『教育社会学研究』第 109 集、5-27 頁。

津多成輔 2017,「女子高校生の性役割観と大学進学意識－自宅通学の可／負荷に注目して」、筑波大学教育学系『教育学系論集』42 巻 1 号、27-40 頁。

引用 URL

「女子氷河期サバイバルー私立女子大学 67 校の未来像をデータから検証」、2023 年 3 月 25 日

<https://news.yahoo.co.jp/expert/articles/061b8c68639321ac12141b8552ddbc74b8998a66>

【執筆担当】

I・II の 4・IV を志水、II の 1 を金南、II の 2・III の 2 の 3) 4) と 3 を新谷、II の 3・III の 1・III の 2 の 1) 2) を岡邑が、それぞれ執筆した。

【謝辞】

各大学の基礎情報に関しては武庫川女子大学教育総合研究所・安東由則教授が集計したデータ(「女子大学統計・大学基礎統計」<https://kyoken.mukogawa-u.ac.jp/statistics/>)を一部参考にした。ここに記して感謝申し上げます。

Self-Presentation of Women's Universities: A Qualitative Analysis of University Brochures

SHIMIZU Kokichi¹⁾, SHINTANI Ryutaro²⁾, OKAMURA Ei³⁾, KINNAN Saki⁴⁾

Abstract :

This study aims to understand the current overall landscape of women's universities and the diversity of their educational policies by analyzing information obtained from university brochures and basic university data, while focusing on the attributes and various characteristics of these institutions. Multiple correspondence analysis revealed that these policies are characterized by two axes: the breadth of educational goals and reforms (comprehensive vs. focused) and the type of educational approach (global /excellence-oriented vs. local/liberal arts-oriented). Notably, university attributes and characteristics showed clear associations especially with the second axis, which represents the type of educational approach.

Specifically, traditional large-scale universities with stable enrollment rates and high academic rankings emphasized developing global talent, leadership, and problem-solving abilities while actively implementing reforms such as internationalization and department expansion. In contrast, newer small-scale universities with lower enrollment rates and academic rankings focused on locally-oriented activities and emphasized cultivation of cultural refinement, intellect, and human character. Some universities, particularly those of medium scale, maintained a balanced approach between these two orientations.

Furthermore, regional differences were evident along both axes: along the first axis, universities in Western Japan showed a tendency toward focused educational policies while those in Eastern Japan were more comprehensive. Along the second axis, institutions in Kanto and Hokkaido/Tohoku regions tended toward global/excellence-oriented approaches, while those in Kyushu, Okinawa, and Tokai regions showed more local/liberal arts-oriented tendencies.

These findings suggest that women's universities, standing at a crossroads, are not monolithic institutions but rather are pursuing diverse roles by leveraging their distinct characteristics and regional contexts.

Key Words : women's universities, university brochures, educational policy, multiple correspondence analysis

1) Research Institute for Education, Mukogawa Women's University, Professor 2) Faculty of Contemporary Social Studies, Doshisha Women's University, Professor 3) School of Nutrition, Senri Kinran University, Associate Professor 4) School of Information and Social Design, Sugiyama Jogakuen University, Associate Professor